
窓の向こうから.....

くらいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓の向こうから……

【Nコード】

N8190B

【作者名】

くらいむ

【あらすじ】

平凡？な高校生に突如降り懸かる魔法使いと不思議な仲間のどたばたコメディー

第1話：黒ローブの疫病神

ある日の事……いつもどろりに学校をサボり帰宅した俺は自室でつまらないテレビを見ていた。

（稲葉 勇樹17才）

平凡な日常に飽き人生に疲れたサラリーマンみたいな高校生とは俺の事だね♪

俺の親父はとある玩具メーカーの社長さんで家にいる事は極めて少ない。

母親はある雑誌の編集長で仕事が忙しく帰るのが面倒だとか……オイツ！！

てな訳で家には俺しかいないんだよねこれが♪

まあそんな平和な時間もあとちょっとで瓦礫みたいに崩れ落ちるだなんて想像できないけどね……

（二時間後）ガシャーーーーン！！

……読者の皆様にも想像していただきたい……部屋で平和にテレビを見ているといきなり窓ガラスが割れる恐怖を！！

窓ガラスが割れたのもびびったけど割った奴が突然……

『今日からここに住むからよろしく！！』

なんて言い出した。はい？わかった。えー、こいつ多分頭の中あれなんですあれ！！

【豆腐】

絶対常識知らずだよねこの【豆腐娘】は…なんか箒が壁に突き刺さってるもん。それで『箒どうしてくれんの？あんたの責任なんだから弁償してね』意味不明だからね」

俺が思うにこの小娘は某国のスパイだ。

そして聞いたやつた。

「ピーー国のスパイがなんの用ですか？」

すると【豆腐娘】が

『スパイ？私は7級魔術士リーナ・バルスロイ様よ！』

あー理解できた。今の自己紹介はあれでしょ？

『私の頭は豆腐じゃなくて腐った納豆だよ』

って意味だね。うん、決めた。全力で追い返す！！

第2話：惨劇の幕

俺とその【トン○リコーン帽子】は泣いている。

俺の部屋は今銃撃戦があつたかのような有様だつた…
放心状態の俺は少し前の惨劇を回想する……。

（一時間前）

『勇くんは馬鹿だねえ』だーからあ私は魔法使いなんだよ？』

脳みそプルンプルンのプリン野郎に馬鹿つて言われたよ……。

あとなんで俺の名前知ってんの？まあいいか……

「魔法使いなら魔法見せて下さいませリーナ様」

フツ……勝ったぜ。

『魔法なんて使えません……ごめんなさい……』ってな感じだよねこれ。
れは。

『いいよ』じゃあ見せてあげるからねー』

えっ！？

『スーパースンダーボオオオル』』

マジか！やばい死ぬよ俺！！

次の瞬間……………死を覚悟した俺はすごい光景を目の当たりにした！！

シュボ……………？なんと豆腐娘の指先から小さな《火》が出ている！！

何に驚いたかって？それは「スーパー」でも「サンダー」でも「ボール」でも無いところだね。

『私の実力がわかったかしら？』

「凄すぎですリーナさん！！！」【しょぼしょぼライターフレア】
なんて技見た事無いです。」

皮肉だよねこれは♪

『んだテメエエエ！！人を馬鹿にしてんのかゴラァァ……………うわあああん』

泣いているよこいつ…ん？

『許さない……………人が一番気にしている事を……………喰らえ【第三サイル試作品零型】』

どこの軍隊の兵器？

うん、なんかやばいね。なんか筈が俺を狙ってるね……………逃げろ、俺

！！！！

つてな感じで部屋は死闘の痕跡が生々しく残っていた。テレビに簞突き刺さってるよ……。

『勇くん……えっと、あの〜』

おっ、謝るんだな？じゃあ俺も謝るかね。

「さっきはごめんな。俺も悪かったよ。」

『これからは仲良くしようね』えへへ〜』

今何て言いました？このトンガリオーン帽子は♪

第3話：居候条件と自爆（泣）

そいつは普通に可愛いかった。

今までトンガリ帽子で顔がよくわからなかったので素顔を見た時はびびったね。

銀色の髪に深緑の瞳でちょっと童顔。年齢不詳の魔法使い（箒の魔法は強力）それが

『リーナ・バルスロイ様よ♪』

（……………）

なんでこいつこんなに偉そうなんですか？

（たいした魔法も使えないくせにさあ……………やっべー箒が俺を狙ってるよ）

「すみませんトンガリ帽子さん！！僕の軽率な発言を取り消して下さい（汗）」

『わかればよろしい♪』

こいつは既に我が家に鎮座している。

俺はこの豆腐魔女を追い払うために最善の努力をしたが……………

『私を追い払うと箒の雨が……………』

てか言い出す。

仕方ないので俺はこの豆腐魔女に居候としての条件を突き付けた。

条件1……………家主の手伝いは積極的にすること。

条件2……自分の思い通りにならないからと言って泣いたり魔法の乱射はしないこと。

条件3……家主の部屋で危ない薬の調合はしないこと。

条件4……ご近所付き合いを大切にしすれ違う人には自ら挨拶すること。

などなど12の居候条件を発布した。

すると奴は

『まっかせなさ〜い♪私は約束を破る奴は大嫌いだから安心してね』

♪

うーん、約束を破る奴は基本的にみんな嫌いだし君自身が約束を破らないとは言つてないよね。

まあいいか♪つてな訳で奴と一緒に夕食の準備。

はつきり言つてトンガリ帽子はとも料理が上手でした!!

綺麗に食材を切るトンガリ帽子……ふと俺の目にはまな板の横に目茶苦茶に切られた野菜達が目に入った。

(なんだこれ?)

不思議に思ったから聞いてみた。

「なあ、この野菜なに?捨てるのか?」

『それは勇くんの野菜だよ?捨てたら食べられないでしょ?少しは考えなさい!』

(……………)

嘘でしょ?これいじめ?

「いじめ格好悪い!!」

(…やべっ、つい熱くなって叫んじまったよ)

(……………)

横から凄い冷たい視線を感じるんだけど……。

横でトンガリが陽気な口調で何かを言い出した。

『居候条件その4…ご近所付き合いを大切にすべし!!交流を深めるためには身近で起こった面白い事件を報告すべし!!今日の面白事件はな〜につかな♪』

その後俺は半泣き状態のままドでかい野菜が入ったクリームシチューを黙って食べた。

第4話：悪魔の歌

このトンガリは本当に馬鹿なんだなあって思ったよ流石に。なんでかって？

それは今日の午後……

「おいっ掃除の邪魔だ！！どけ！！いつまでゴロゴロしてんだトンガリローブが！！！！！！」

『ゴロゴロなんてしてませーん♪ コロコロしてるんですよーばーか』

「変わってねえーだろ馬鹿トンガリ星人が」

（今あいつ何て言った？馬鹿トンガリ星人？殺ってやるよマジで……この最凶魔女リーナ・バルスロイさま舐めんなよ？）

『お料理、お料理楽しいなあ〜いつもと変わらぬ料理風景〜今日は何を作るつか？』

何いきなり意味不明な歌歌ってんのこいつ？

『（セリフ）

「いじめ格好悪い」…………… ちょっと奥さ〜ん、我が家の穀潰しがいきなり

「いじめ格好悪い」とか言い出したんですよーあははははは」

グサツ……殺られた。

俺の弱みを握るこいつには勝てねえ……

『やっと自分の身分がわかったのかい？チミは黙ってお掃除でもしてなさい。』

「グスン……ごめんなさいバルスロイ様」

いつか殺すからなあこの【ライターフレアーのトンガリ帽子】が……！

『おい穀潰しいー掃除終わったら飯な』

こいつ絶対女じゃねーよ。だって普通女の人には《飯》とか言わないもん……。

（一時間後）

『いやあー今日は勇くん頑張ってたね♪頼んでもないのにありがとう
うん♪』

うん、頼まれてはない。だって命令だったから。

明日は学校だ。

俺がトンガリ帽子から解放される唯一の時間……早く学校に行き
え。

『勇くん明日は学校でしょ？私も行くね』』

「お前は無理だから、そんな馬鹿みたいな格好の奴は門前払いだ。」

『じゃあ私は勇くんの部屋で爆発助長剤βと都市爆破薬デストロイの調合を……………』

「よしッ、着いてこい。」『やたーーーーー』』

第4話：悪魔の歌（後書き）

次は学校編です！新キャラ登場予定です♪

第5話…こいつらすげえ（感嘆）

今日はトンガリ帽子と学校へ……この世に神様はいないのか？
俺は昨日トンガリ帽子が寝てた時に聞いたんだ…あの寝言？を……。

『あーはっはっはっ……くっくくくつ明日の学校が楽しみだぜ……
明日は学校の前で《勇くんお料理中にいきなり
「いじめ格好悪い」なんて言わないでえー恥ずかしいからあゝ》っ
て叫ぶんだ……ムニヤムニヤ』

俺も流石にあれを聞いた時には殺人犯になる覚悟もしたね。

ジリリリリ……バキッ……！？何の音？

『おはよー勇くん♪今日は私が朝食を作ってあげるよん♪』

……朝からカツ丼は反則だよねトンガリさん。

『あーそうだ、勇くんのあのネタ封印するから♪』

今凄い素敵な事言ったぞこいつ！…しかしなんでいきなり封印なんだ？聞いてみるか。

「なにゆえ例のネタを封印するでおじゃるかりーナ殿。」

『ふむ、よくぞ聞いたな穀潰しよ』

後でぶっ飛ばす。

『某は昨晚例のネタを学校の前で叫んだ直後貴殿に殺されるドリームを見たでおじやるよ。だから怖くなったのである。』
なんで最後だけ学者風なの？あとドリームは夢って言った方がしっくり来るよね。

うれしいなああのネタが封印されるなんてドリームにも思わなかったからね。

さてと、

「おーいトンガリ帽子い学校行くぞお」

『まかせろ！出席日数ぎりぎり男！！！』

(……………)

まあ事実だし許す。

学校は徒歩40分くらいだ。自転車ならもつと早いんだけどトンガリ帽子は補助輪がないと自転車に乗れないと言う衝撃の事実が発覚したので仕方なく徒歩で行く事になった……何歳だよお前は(泣)

当然自転車で行く予定で家を出たんだから大遅刻だ♪

朝って以外に静かなんだなあ小鳥の囀りとかが心地いいね♪♪♪

「あー勇樹だあー！こんな時間から登校とは珍しいね…♪おっと」
グシャ……………

「ごめんねー【内臓爆砕拳】でちゃた……えへ♪」

「エヘッ」じゃねーよ馬鹿女が……バタッ

紹介します。今俺の内臓に大ダメージを与えたこいつの名は【神崎霞^{かすみ}】俺の幼なじみです。

家が道場らしく謎の武術で俺を見るなり新技の威力を試す完全に頭パーな人です。

「ねえねえ昨日のあれ見たあ〜？」

『見た見たあ〜あれでしょ？特別番組【芸能人に超過激どつきり！でもターゲットにはネタばらししないからタチ悪いよね特集】でしょ？』

うわぁータチ悪ッ！！

「あはは、だよなー」

『私なんてあのシーンがあまりに面白いから笑いすぎて勇くんの大事にしてるマグカップをテーブルにたたき付けて粉々にしちゃたもん』』

お前は死刑確定だトンガリ帽子♪

てか、こいつら知り合いなんだあいつ知り合っただろ？

『それでね、あの後……なんだよ』』

「それ最高ー！！あははははは」

マジ仲良しさんだなこいつら………どんな風に出会っただろ？学校で聞か。

「ねえ勇樹くん」

『ねえ勇くん』

「……ん？なんだ？」

「『この人誰なの？』」

お前ら初対面!!?

第6話：腹黒魔女リーナ様（前書き）

前回の続きです！

第6話：腹黒魔女リーナ様

初対面なのにテレビの会話で盛り上げられる馬鹿二匹と共に学校へ到着。

あの後二匹はすぐに打ち解けあのろくでもない番組の話に花を咲かしていた。

「なあトンガリ帽子い、お前学校に入ったら一発でつまみ出されるぞ？」

『誰がトンガリやねん！』

「ツツコミはいいから真面目に考えてねトンガリ帽子さん」

『まかせろ！留年確定穀潰し！！ちゃんと策があるんだよね』
ウフツ』

ウフツとか言つてごまかしてもお前の死刑は取り消せないよ』

「じゃありーナちゃんの作戦を聞かせて』」

『まあ見てなさい同士達よ。』

無駄に頼もしいなお前は……どーせまた腹黒い事考えてんだろっけど。

『よしッまずは校長室に行くぜ！！私に続け！！』

「うおおおお」×2

ちなみに今は群雄割拠の時代ではありません。

結構テンション上がってる馬鹿トリオは現在校長室前。
切り込み隊長ことリーナ・バルスロイことトンガリ帽子が校長室の
扉を蹴破る。

何がしたいのこの子…。

そして校長があたふたしているところに一言。

『これは警告です。あなたが浮気している事を奥さんにばらされた
くないならばリーナ・バルスロイ様の本校への入学を許可せよ。』
脅迫ですか君の作戦は…でも校長だって教師と言つ聖職に就いてん
だから浮気なんてする訳ね！……………

「イエッサー」

校長めっさ綺麗な敬礼しました。

この校長大丈夫なの？

『校長なんてちよろいぜ♪いやぁーしかし勇くんもとい留年最有力
候補と同じ学校なんてワクワクするよ♪』
傷付くんだけどそれ…………目頭が…………熱い。

しかし以外な事にトンガリ帽子がいる学校はこれ以上無いくらい面
白かった。

まずあれだね…………消しゴム。

数学の時間だったかな？先生が黒板に式とか書いてる時に投げたんだよね……あの300円くらいする巨大消しゴムを……全力投球だった。

だって先生ふらふらしてたもん。

すぐに捕まったリーナは職員室に強制連行。なぜか共犯で俺も……意味不明なんですけど。

でも腹黒魔女の狙いはここにあっただろう。

教室から出とずっと笑いこらえてるもん。

もう少しで職員室……横には校長室……。

その時腹黒魔女はこう叫んだんです。

『助けて校長ーこの先生が証拠写真よこせて……』

バガーン

校長は扉を蹴破ると韋駄天のようなスピードでリーナの前へ。

「御呼びですかリーナ様」

『偉いぞポチ♪このダメ教師にお仕置きしなさい』

とまあこんな感じ♪

流石は天下無双の腹黒魔女だね。

帰りに素朴な質問もしてみたりした。

「なんでお前校長が浮気してたの知ってたんだ？」

『はあこれだから天下無双の落第王は困るんだよねえ。あんなの適当に言っただけだよ』浮気してなかったら力づくだったよ』

力づく……怖ッ！！

震える俺を見てトンガリ帽子は笑っている。

でも笑ってられるのも今の内だよリーナさん。

帰ったら君には地獄の強制労働がまってるんだから……。

第7話：小鳥、お父さん、米粒

学校の帰り道。

春の風が心地いいなあなんて思いながら帰路につく俺とトンガリ帽子。

トンガリ帽子は公園の木の枝をじーっと見つめている。
何を見てるんだろ？と思いつつトンガリ帽子の視線をたどる……そこには可愛い小鳥さんが歌を唄っていた。

（やっぱりこいつも女の子なんだな、うんうん。）

『勇くん……。』

なんだいきなり？『あの小鳥さん可愛いね』とか言うのか？

『今日の夕飯はアレに決定だね』

うーん、やっぱりこの人おかしいですね。
バシッ！……！

「下らない事言っていないで早く帰ろうねトンガリさん」

『グスン……勇くんの馬鹿……食わず嫌い！野蛮人！……！』

野蛮人はお前だろ……！

食事の準備をする俺は一人キッチンへ。トンガリはと言うと…………。

『よっしあー上がりー!!』

ランプの定番、【大富豪】を一人でやってます。

『また俺の負けかぁ。』

『文句言っでないで早く配りなさい大貧民が!!』

『そっだそっだー×3』

一人5役は凄い。それを可能にする彼女の頭脳は偉大だと思う。ちなみに『×3』って言った時には彼女の頭脳に同情したね。

「飯できたぞトンガリー馬鹿な事は止めてさっさと来い。」

『了解です!!』

素直でよろしい!!

ちなみにこいつへのお仕置きは風呂掃除、部屋掃除、危険な薬物の撤廃に決まった。

『やっぱりあれは捨てられないよ勇くん。あれはお父さんの形見だもん。』

(……………)

「普通のお父さんは【遺伝子操作薬・みんな狂人化しちゃえ】な

んて物騒な物持ってないよね。……………あと君のお父さん普通に生きてるよね。」

『ぶはっ！貴様なぜそれを……………できるな……………フッ』

いや、別に『フッ』とか言っても全然格好よくないから。

あとご飯吹きだしたらちゃんと拭こうね。スルーは駄目だよ？

「拭け……」

『やだ』だって汚いもん。』

(……………)

「黙って拭けえええ馬鹿魔女おおおお」

『拭きます！！拭かせて下さい勇樹様！！！！！！』

疲れた……………半泣き状態でテーブルに散らかった米粒を拭き取る奴は茶碗、皿、コップなどをことごとくひっくり返した。

その絶望的な状況に泣き崩れるリーナ……………呆然とテーブルを見つめる俺の頬に涙が伝う。

リーナを慰めるのが先か、修羅場と化したテーブルを片付けるのが先か。……………実は選択肢はもう一つだけある。追い込まれた人間がたどり着く究極の選択肢、それは……………

《現実

逃避》

さあどうする、俺！！！！

第8話：お掃除と幻獣

結局究極の選択肢は選ばなかった。

だって目の前で泣きながらテーブルを掃除してる人がいるから。

「手伝ってやるから雑巾持ってきて来い！」

『勇くんは手伝わなくていいよ……グスン』

かなりへこんでるなこいつ……。いつものパターンなら……

『えっ？手伝ってくれるの？じゃあ後はまかせた！終わったら教えてね♪』

みたいな感じになるはずだ。

俺は自分で雑巾を絞りテーブルへ向かう。

(……………)

改めて見ると凄じ有様だなこりあ……。テーブル自体が一枚の皿になってるようなもんだ。

二人の珍プレーもあり4時間で掃除は終了。珍プレーが無かったら30分で終わったと思うよ♪

『勇くんお手伝いありがとございました♪』

「どういたしまして、今後からはお米を大切にして下さいね。」

『はい♪』

常にこれくらい素直ならいいんだけどなあ（泣）

『でもこんな姿をフランに見られたら私もう死んでたよぉ♪』

《フラン》？誰それ？

「ねえトンガリさん、フランって誰？」

『勇くん知らないの？フランはすつごく性格悪い馬鹿幻獣なんだよ♪』

お前に性格悪いって言われたら俺なら間違いなく首を吊るね。
しかし気になる……

《幻獣》

幻獣ってのはあれだろ？神話やお伽話で出て来る空想上の動物。
麒麟とか鳳凰みたいな奴が有名かな？

でもなんでこいつがそんな事言い出すのが不明。

（思考中……）

魔法使いがいるんだから幻獣が一匹や二匹いてもしかたないね♪……
……と言うなんともマヌケな結論になっちゃいました♪

「んで今そいつはどこにいますかトンガリさん」

『知らな〜い♪でもそろそろ来るよ♪かなりご立腹だと思っからね
♪プッ』……そろそろ来る……か…ふざんな!!

ご立腹の幻獣が暴れたら俺死んじやうから!

とにかくどんな奴なのか聞くかな……。強そうな奴なら逃げる!!

「トンガリさん、その幻獣さんはこの世界では何て呼ばれてるの?」

トンガリ帽子は笑いながら言った。

『ユニコーン』

第8話：お掃除と幻獣（後書き）

次回、新キャラ登場です♪

第9話：幻獣ユニコーン登場！！（前書き）

予告通り新キャラ登場です！！

第9話：幻獣ユニコーン登場！！

《ユニコーン》

……ユニコーンってあれでしょ？綺麗な角を持つてる馬みたいな奴。

そんなの来るはずが無いよね♪だいたい住所知らないはずだし♪

『ユニコーンは馬鹿の鏡みたいな奴だから暴れだしたら止まんないよ♪
じゃあおやすみ♪』

トンガリ帽子は明日霞と買い物に行くらしく有頂天になっていた。
俺はユニコーンが怖くて寝られない（泣）
心配しても無意味なので一応布団の中へ入る。

ジリリリリ……ペシッ！！いつの間にか寝ていたらしく目覚ましが鳴った。

ソッコーで止めて二度寝へ突入だ………ピンポン………誰か来たよったくこっちはトンガリ帽子に解放されて久々にゆっくりできるんだから邪魔しないで下さい！！
でも出ないといけないんで玄関へ………。

「どなたですかぁ？」

『ここに住んでる可愛い女の子に合わせて下さいな♪私一目惚れしちゃいましたの♪』

可愛い女の子？誰それ？この家には俺と疫病神しか住んでないはず…… あっ、あの疫病神も一応女の子だった！！

澄んだ声からしてこの人は女性だと思う。一目惚れするなよ……。

しかし困った。あいつが歓喜のあまり奇声とともに家を出て言った時の時刻は午前4時。

常識知らずにもほどがあるだろ！！

「今あいついないんですよ。用件があればお伝えしますよ？」

『じゃあこれを渡して下さいませ。』

その女性は綺麗な花束を差し出している。

俺は玄関を開けて花束を受け取るうとした……その時！！
腹部に激痛！！なんだいきなり！？

『オラアア、隠れてないで出てこんかいリーナアア！！今日こそテメエを簀巻きにして《聖霊の貯水池》にぶち込んでやるよ！！』

（この人誰ですか？初対面の人に蹴り喰らわせて謝りもせずトンガリの名前を叫んでる頭から白銀の角を生やしたこの人は一体誰？）

(……………)

「ユニコーン!!!!!!」

白銀の角女は一瞬ビクツとしてこちらを振り向く。

『何ですのあなた?いきなり人の名前を叫んで…失礼な人ねえ。』

あんたの方が20倍失礼だから…。

『それよりあなた!!!ここにリーナ・バルスロイって言う馬鹿魔女がいるはずですわ!探しなさい!!!』

「今あの馬鹿魔女はいないんだよ馬鹿幻獣がああああ」

(……………)

やばい……殺される。

『うわあああああああん!!!お母様助けてえー!軟弱男に馬鹿って言われたよおお………しくしく』

泣いたよこの人もとい幻獣……それにしても軟弱男は酷いよね……しくしく……………。

(一時間後)

俺はお嬢様な彼女に似合うように紅茶を注いでいる。

「紅茶ですよ、どうぞ。」

『ありがとうございます。お気持ちはうれしいのですが私実はオレンジジュースしか飲めませんの。おーほっほっほっほっ』

ガキかあんたは！！あのトンガリ帽子でもグレープフルーτζジュースまでなら飲めるんだぜ！？

『……と言う訳なんです。』

うーん、これは怒ってもしかたないなあ。何がだつて？今聞いたんだよね、ユニコーンさんがトンガリ帽子に怒ってる理由を。

詳細はこうだ。

フランさんの誕生日当日。あのトンガリ帽子からプレゼントが届いたらしい。

喧嘩ばかりしていたリーナからプレゼントを貰うなんて夢にも思わなかったらしい。

普段は嫌な奴だけど誕生日にプレゼントを贈るなんて以外にいい奴なんだあと思つたんだとか。

フランさんは早速部屋でドキドキワクワクしながら綺麗にラッピングされた箱を開けた…………。

中には手紙と小さなお人形が一つ…………。

人形はとても可愛かつたんだとさ。

問題は手紙にあつた。

内容はこうだ！！

《いつも喧嘩ばかりしてるお詫びに人形送りました♪気に入ってくれるとうれしいなあ♪また今度遊ぼうね。
突然変異型のトナカイ族の長女様へ。》

（この手紙の最後って絶対悪意が込めらるてるよね。）
その日からフランさんの復讐の旅が始まったんだとさ♪

あのトンガリ帽子今日は帰って来ないでほしいな。
多分フランさんが暴れて俺死んじゃうから♪

ガチャ……………

リ：『ただいま♪あー面白かった……………ついに来たな【突然変異トナカイ族長女】！！』

フ：『殺す！！』

ナイスタイミングで帰って来たね君は。しかも普通に挑発したね。

馬鹿魔女と馬鹿幻獣が睨み合ってるよ……………【一触即発】ってやつだなこりゃ……………よしッ

逃げる♪

第9話：幻獣ユニコーン登場！！（後書き）

次回はマジバトル！！！！

第10話：馬鹿魔女VS馬鹿幻獣

睨み合う二人……………一時間も睨み合うなんて中々忍耐力あるなこいつら。

リ：『びびってんの？あんた足震えてるでしょ今？』

フ：『挑発だけが取り柄のまな板娘さんこそ恐怖で硬直してるんじゃないくて？』

プツーン……………あ、切れた。

リ：『黙ってる脇役がああ！！テメエのそのふざけた身体が気に入らないんだよおお！！あとそのださい角も……………』

トンガリが言い終える前に角女のハイキックが直撃！ぶっ飛ぶトンガリ！！食器棚粉碎！！！！

フ：『生れつきなんだからしかたないでしょ！？だいたいあんたの帽子何よ？タケノコが頭から生えてるみたいで不気味なんですけ……………』

タケノコ帽子がフランの顔面に直撃！！ちなみに帽子の中には食器棚の残骸が入っていてかなり重くなっていました♪

頭から血を流しながらトンガリが一喝！！

リ：『タケノコは美味しいから頭から生えててもいいんだよばーか……………！！！！』

流石は神の頭脳を持つ女だ！凡人では理解すらできない名言を軽々と口にします！

フ：『あんた馬鹿じゃないの？やつぱりタケノコ帽子に養分吸い取られてるから頭がパーなんでしょ！？』

リ：『うるさい！これでも喰らってるトナカイ女が！必殺【箒星
て素敵♪】』

ゆ&フ：『「だっせー！！」』

やばいつて！すんげー睨まれてるよ俺（汗）
箒が飛んできたーীগシャ、バキッ、ミシッ、チーン♪

リ：『雑魚は寝てなさい！』

雑魚って言われた……もうヤダ（泣）

フ：『よそ見とは愚か者め！！喰らえッ必殺【氷撃拳】』

床から突如現れた氷の拳がリーナの身体に直撃！！凄い威力だ！！
とばっちりを喰らったソファァーが吹き飛ぶ！！

フ：『油断大敵なのよ！』

リ：『それ……はこっちの台詞なんだ……よ……超必殺【リアル黒髭・
箒バージョン】』

ふわふわと浮いていた箒が一斉にフラン目掛けて飛んで行く……。
フランも何とか避けていたが一本の箒が角に直撃……そのまま気絶。
リーナは【リアル黒髭・箒バージョン】を放った直後に気絶してい
る。

気絶する馬鹿二人はことごとく我が家を破壊した。

食器棚・ソファ・DVDプレイヤーなどたくさんの家具が殉職した。洒落にならないぞこれは。

さて、どうしたものか？

気絶中だったあいつらはいっしょに夢の中……。

俺一人で片付ければ確実なんだがそれでは腑に落ちない。

よし、こいつらが起きたら片付けさせる。

文句を言ったらぶっ飛ばす！！

でも、こいつら中々起きないだろうな。

しかたないから俺も少し寝よう……明日の重労働のために体力を回復しなければ……。。

第11話：理不尽な密談♪

予想通りこいつらは全く起きなかった。

俺が仮眠を取ったのはせいぜい4時間くらい。

普通の気絶ならもう起きてるよね、流石に。

じゃあ何で起きないかって？そんなの簡単♪だってこいつら《寝てるフリ》してるだけだもん……。

俺は呆れて部屋へ戻る。

(……………)

リ：『ねえねえフラン、なんで勇くん掃除しないの？早く片付けてくれないと起きれないよ……』

フ：『リーナ、よくお聞き！今起きたら私達の負けよ。』

リ：『なんでえ？』

フ：『私達が今起きたらきつとあの人は私達に掃除をさせますわ。そんな理不尽な事させられるのは嫌でしょ？』

リ：『絶対やだッ！！』

フ：『でしよう？だから寝てるフリをしてあの人が掃除するのを待つよ！！』

(……………)

なんか俺が悪者みたいになってんだけど……。こいつら二人して腹黒いな……。！！

この馬鹿二人を起こす方法は一つ……。この方法は賭けだ……。失敗すれば死ぬ……。だがやるしかない！！俺は大きく口を開きこう叫んだ！！！！

「いつまで寝てんだ！！さつさと起きろ《まな板娘》と《ダサ角女》！！！」

フ&リ『死にてーのか！！クソガキがああ！！！！』

「さつさと片付ける馬鹿共……。訴えるぞ。」

リ：『ウツタえるってなんですかあー！？てか何語？』

あちゃーもう無理だわこれ。

だって『何語？』とか言ってるからねこの馬鹿」

しかしフランは

『裁判怖い、裁判怖い、裁判怖……。』
と震えてる……。

この幻獣……。前科持ちだな。

よしッ！この幻獣は利用価値ある」

「ちょっといいかいフランさん」……………ゴニョゴニョ」

フ：『リーナ！！お掃除するわよ！早く準備しなさい！！！！』

リ：『ええーヤダよあ……』

勇&フ

「『っっっ言わずと立てー！ー！』」

リ：『OK！任せろー！ー！』

足震えてますよリーナさん♪

第11話：理不尽な密談♪（後書き）

次回はお掃除モードです♪

第12話：召喚獣とお掃除（前書き）

いきなり新キャラ登場です（汗）

第12話：召喚獣とお掃除

フラン＆俺の説得と脅迫でリーナも渋々ながら掃除に賛成した。

「まずは足の踏み場の確保だッ！」

リ＆フ『オオオオオ!!』

リ：『パシリ召喚!!』

「ふざけないで掃除して下さい!!」

(……………)

いつの間にか床に変な模様が浮かび上がってる!? しかも光ってるよ!!—すげー!!—
魔法陣ってやつ?

その中から凄まじいスピードで何かが出て来た。

リ：『よしッ召喚成功ッ』

?：『勝手に召喚すんなよ。はあ、お前何様のつもり?』

リ：『何よその態度は!? あんたが私と召喚契約したんじゃない! さっさと働きなさいよ!』

?：『お前勘違いすんな! 召喚契約してやったのは僕だから。しかも召喚契約するのは召喚される側に決定権があるんだよ! 契約書類に書いてただろ(嘘だけど)』

リ：『そんなの知らないもんッ読んでないからッ』

？：『読みたかったけど漢字がありすぎて読めなかったの間違いだろ……プッ』

(………プッ)

リ：『助けてえ勇くん！テリ阿斯がいじめるよお』

どうやらこの毒舌召喚獣は テリ阿斯 と言う名前らしい。
緑色の粘土で作られた人形みたいな風貌。
大きさは500mlのペットボトルくらい。

フ：『テリ阿斯を呼ぶなんて馬鹿ねえ……掃除が大変になるだけよリーナ……』

テ：『なんだと貴様！人を邪魔者みたいに言いやがって………起訴すんぞ？』

フ：『裁判怖い、弁護士信用できない、有罪判決やダ……』

テリ阿斯強し！！

テ：『オイッぼんくら共！僕が指示してやるからさっさと掃除しろ。』

テ：『まず食器棚壊した【漢字読めねー奴】！お前は割れた皿、コップ、その他を新聞紙に包め！』

リ：『了解しました！』

テキパキと指示を出すテリアス……………以外にしっかり者だ！！
さらにフランにも指示を出す。

テ：『えーっと、お前はあれだ、【裁判恐怖症】！お前はソファー
の綿を掃除後、溶けて水になった氷を始末しろ！』

フ：『了解です！隊長』

テリアスのおかげで少しずつ部屋が片付いていく！！凄いぞテリア
ス！！

テ：『オイッ【漢字読めねー奴の保護者】！あんたは僕にお茶とお
菓子を持って来てくれ！！大至急で頼むぞ！！！！』

(……………)

俺はパシリか！？

まあ実際こいつの指示で【漢字読めねー奴】と【裁判恐怖症】がち
やんと働いてるんだからいいか…。

テ：『じゃあ僕は帰るからな！もう二度と呼ぶなよリーナ！！』

と言いながらテリアスは魔法陣へ飛び込んだ

召喚獣の意味無いじゃん。

さて、部屋は片付いたが改まって見ると失った物は多い。

明日は俺、リーナ、フラン、の三人で備品の買い物へ……。

かなり疲れたのか二人は爆睡している。

今日はフランも泊まっていくらしく図々しく俺のベッドで寝ている。

(……………)

布団に角刺さってるよフランさん…………… (泣)

第13話：まさに野性！！

今日は馬鹿二人と買い物へ行きます。

朝からハイテンションの奴が二人もいる……。

リ：『今日は買い物！ワクワクする〜』

こっちはドキドキするよ！

フ：『買い物なんて久しぶりですわ』何買って貰いましょうか』

誰に買って貰うの？私物は自腹で買えよ角女………角

……。そういえばこの人 角はどうするの？

角生やした女が普通に街中歩いてたら間違い無く見世物小屋行きだから！！

「フランさん、角はどうすんの？」

フ：『ああこれですか？心配いりませんわ』えいッ』

フランが指をパチンと鳴らすと頭から生えていた角がほどけ綺麗で長い銀色の髪に溶け込んだ。

リ：『出た！フランがコンプレックスを隠すために編み出した魔法だあ』

フ：『この魔法を習得するためにどれだけ修行をサボった事か……いや、それはダメだろ。』

リ：『でもその魔法って理性が無くなったら解けるんでしょ？大丈夫？』

フ：『大丈夫に決まっていますわ♪もしばれたら見てた人を皆殺しに……』

バシッ！！

「そんな事したら起訴するから♪」

フ：『ヒイイ！！』

これで角女は封じた。

後はあのトンガリ帽子だけだ。

「お前も魔法使ったらどうなるかわかってるな？」

リ：『うん♪魔法使ったら簀巻きにして《聖霊の貯水池》にぶち込むんでしょ？』

物分かりが良くなったねこの子（泣）

「じゃあそろそろ行くぞお！準備できたかあ？」

リ＆フ『まかせろ！！』

「帽子は置いて行けよ魔女！」

リ：『いちいち指図すんなよ。』

なんでこんなに口が悪いのこの子。テンション下がるんだけどなあ……。

フ：『早くしてくれませんか？』

じゃあ行くのでしょうか…。

リ：『うわぁーあのクレープ美味しそうだよぉ♪勇くん買ってえー
』！』

フ：『勇樹さん！あそこの喫茶店でパフェを食べませんか？』

「ふざけんな！！」

フ&リ『けッ……。』

こいつら怖いです。クレープ13個、パフェ6杯、饅頭8個を人の
金で食べておきながらまだ食う気か！！

「君達は関取にでもなるつもりなの？」

リ&フ『ぐはッ！』

よしっ！これでこいつらの暴飲暴食は封じた！！
気を取り直して買い物だ♪

あんまり食器買えなかった♪そりゆそうだ……トンガリと角女の暴飲暴食で財布から悲鳴が聞こえたもん♪

「お前らのせいで必要な物がほとんど買えなかったんだけど……。』

リ&フ『食器なんて無くても飯ぐらい食えるだろ！

女々しい事言うな！！』

(……………)

こいつら罪悪感のかけらも無いのか！？しかも別に女々しい事じゃねーだろ！！

「お前ら晩飯抜きね♪」

リ&フ『ふざけんな！皿無くても食べれって言ってるじゃない！？』

「じゃあお前らがテーブル掃除すんのかい？」

リ&フ『そんなの掃除したい奴が勝手にすればいいのよ！！』

……………お前ら野性すぎ！！

第14話：不思議な行動……。 (前書き)

今回のリーナは全開モードです♪

第14話：不思議な行動……。

本当に皿無しで夕飯食べてたよこいつら……………。

夕飯の時トンガリ帽子の名言が飛び出した。

リ：『たまにはテーブルの温もりを直に感じながらの食事もいいね！木の味がしないのは残念だけど』
♪

(……………)

意味不明。わかったのはお前の頭がすでに手遅れって事だけ！俺がトンガリに冷たい視線を送ったらこう言われた。

リ：『あれ？勇ちやまはお皿さんが無いとご飯も食べれないのかな？可愛いでちゅね』
♪

うぜーこいつ！鈍器でこいつの頭ぶん殴りたい！！フランもそれを聞いて俺の事を鼻で笑いやがった！テメーら俺の実力を知らないから笑えるんだよ！見てれよ馬鹿共！？俺はとつさに皿をひっくり返し叫ぶ！

『皿なんていらねえ！ついでに箸もだ！食事なんて口と手があればできるんだよ！！悔しいか？悔しいならお前らも箸なんか使ってんじゃねーよバーカ！！』

リ&フ：『一人でやってるバーカ』
♪

(……………)

涙が止まらない。これが敗北感ってやつか？

フ：『あら、勇ちゃま泣いてるの？お姉さんが慰めてあげましょうか？』

リ：『あははは〜フランにまでいじめられてる〜♪日頃の行いが悪いからバチが当たったんだね♪』

言い返せない……上手く喋れないから。

フ：『ごちそうさまでした♪あはは、勇樹さんそんなに落ち込ないで下さいな♪お掃除手伝ってあげますから………ね？』

うう……いい奴だなフランは………。

リ：『ごちそうさま！勇くんまだ泣いてんの？そんなに落ち込んでるとお肌に悪いよ？お掃除なんて絶対手伝わないけど元気出してね♪』

（15分後）

俺とフランの頑張りでテーブルは綺麗になった。しかしあいつはキッチンで《シャドー皿洗い》をやっている。
意味無いから……。

リ：『ふう、お皿洗ったよー！』

これ以上無い達成感を得たのか満面の笑顔で俺を見る馬鹿。その笑顔には一点の曇りも無い。

珍しい事に俺の隣にいるフランまであいつを見て呆然としている。

フ：『私……あの子があんなに頭が弱い子だとは知りませんでしたわ……………』

同感です。なぜならあの笑顔はやり遂げた者の笑顔なのだ。彼女は嫌味でもなんでも無く本気で《シャドー皿洗い》をしていた事があの笑顔からわかる。

リ：『どうしたの？二人して珍しい物でも見るような顔して？』

お前は《ネス湖の怪物》より珍しいよ……………。

第15話：花見、砂山、パジャマ

今日はHARDな一日だった。今、俺は砂まみれだ。どうしてかって？じゃあ説明しようか…………。

今日はフランさんの提案で近くの公園に花見へ。

俺の予想だとすでに桜の花は散っている…………。

つかニュースで言ってたし。

教えてあげたいがハイテンションなこいつらにそんな事言えない。言ったら絶対、

リ&フ『ニュースを鵜呑みにしてんじゃねーよ！夢がねーなあー』

とか言われて俺のテンションが急降下するからね♪

リ：『早く行こうよー♪』

トンガリ帽子に急かされ俺とフランさんは家を出た。公園までは家から20分くらいで行ける。

リ：『ねえねえフラン♪ あんた馬みたいなもんでしょ？私達を乗せてってよ♪』

フ：『嫌よ！あんたの方こそワープとかの魔法覚えなさいよね』

フランさん、角出て来てるから！

リ：『使えない馬だな…』

ここで文句を言い返さないフランさんはちょっとだけ大人だ。

そうこうしている内に俺達は公園の前まで来ていた。桜の花は……咲いていた。ほとんど花も残っているから今がピークなんじゃないかと思うくらいに……。

リ：『うわぁーすつごく綺麗！勇くとフランも早くおいでよ』

ここは市営の公園でどこにでもある公園と何ら変わりはない。実際あるのは滑り台やブランコ、砂場などいたって平凡な遊具ばかり。

だからこそ公園の中央に鎮座する一本の大きな桜の木がより輝いて見える。

フ：『綺麗ですわねーまさに春の風物詩ですね』

なかなか上手い事を言うフランさん。

リ：『桜の花もいいけどやっぱり私は桜餅がいいなあ』

花より団子的な考え方かお前は！

春の陽気が実に心地いい。フランさんは桜を眺めながらのほほんとしている。トンガリ帽子はいつの間にか砂場で山を作って遊んでいる。実にほえましい光景だね♪

リ：『勇くゝん、山を貫通させるから手伝って〜!』
トンガリ帽子はとてつもなくでかい砂の山を指差しながら呼んでいる。

まあ手伝ってやるか!

「今行くから待つてな。」

近くに行くときめて山のでかさに驚く!

俺の身長はだいたい170センチくらいある。そして山は俺の首のところまである。

いつの間にこんな砂山を作ったのか不思議だ。

リ：『勇くん何ボ〜つとしてんの?早く掘ろうよ〜』

山を掘り始めて20分。……………やばい、楽しい!

いつ自分の手に相手の手が触れるのか……………貫通の喜びを知ったその瞬間人はかつて無い達成感を得るだろう。

俺の上半身は山に開いたトンネルの中。上半身入れても貫通しないなんて絶対おかしい……………。

リ：『勇くゝん、この山異常だよ!どんだけ掘っても貫通しないよ……………。もしかして穴がズレてるのかなあ?』

それは俺も考えていた。もしそうなら今から修正しなければならない!ここまで来て貫通させなかったら俺は絶対に後悔する!

「よしッリーナ！穴を少しずつ横に掘ろう。」

リ：『まかせろ！』

穴掘り再開……俺はすでに腰まで砂山の中。今までと感触が違い！確かにリーナの手がそこに……！

フ：『リーナあー帽子が飛ばされてますわ！』

リ：『えっ？早く戻らないと帽子が……！』

おいッ山の中で暴れるな！崩れたらやば……ドシャアアアアア！崩れちゃった！俺とリーナは二人共生き埋め。

こんな死に方は嫌だ！ じたばたと暴れるリーナ。しかし暴

れていた手が静かに動かなくなった……。

明日の新聞のトップは決まったな……。

【巨大砂山で男女二人が生き埋め！病院へ搬送後間もなく死亡】

だな。

その後俺とリーナは半死半生のままフランに引きずり出された。フランは足をばたつかせながら苦しむ俺達を見て大爆笑していたらしい。

しかし俺達の動きが止まったのを見て流石にやばいと感じたんだって」

フ：『あゝ面白かった』また二人で埋まって下さいな』今度はテープに録画しますから』

勇&リ

「『ざけんな!』」

俺とリーナが叫ぶとフランはしゅんと小さくなった。

家に帰るやいなや俺とリーナは洗濯機に今日着ていた衣類をぶち込む。

(……………)

パジャマ姿にトンガリ帽子ってどんなセンス？

フ：『パジャマの時くらい帽子は脱ぎなさいよ……。それではお二方、また明日です』

フランさんは帰ってしまった。でもどこに帰ったんだろう？ 気になる……。だがそれより気になる事が一つある……。トンガリの奇行だ。奴は俺の部屋と自分の部屋を何回もダッシュで行き来している。

「何してんの!？」

俺が聞くとトンガリが足を止めて言った。

リ：『ワープ魔法の練習♪』

いや、それは無理だろ♪

第16話：ワープ魔法習得訓練と最強の杖

現在我が家にはテリ阿斯がいる。パジャマ姿のリーナが呼び出したのだ。

フ：『ねえねえ早くワープ魔法教えてよテリ阿斯うー』

テ：『お前が一週間僕の奴隷になるなら教えてあげてもいいぞ。』

リ：『わかったから早く教えて下さい。（フッ、仕事なんてさりげなく勇くんにさせればいいんだよね♪）』

テ：『じゃあまず肩揉め』

リ：（チツ、気付きやがったかこの緑粘土め……。）

テ：『今なんか言っただろお前……。』

リ『何も言ってないですテリ阿斯さん♪早くテリ阿斯さんの肩を揉みたいなあ』

リーナは肩揉みに悪戦苦闘している。テリ阿斯は小さいので親指と人差し指を起用に使わなければ肩を揉めないらしい。

5分くらいして満足したのかリーナを止めた。

テ：『お前の忠誠心はわかった。面倒だけどワープの魔法を教えるやるよ。』

リ：『ありがとうございます師匠！』

こうして《ワープ魔法習得訓練》が開始された。

テ：『まず修行の前にそのうつとうしい帽子脱げ！パジャマに帽子なんて馬鹿がやる事だ！……………あつ、お前は馬鹿だったね……………ごめん。』

いや、それ謝ってないから。あとあの子、半泣き状態だから。

リ：『ごめんなさい師匠……………私が間違っていました…グスン…』

泣きながら帽子を脱ぐリーナ。テリアスが一言。

テ：『じゃあ修行を始める！まずはお前が持つてる杖を出せや！』

杖なんて持ってたかあいつ？見た事ないけど……………。

リ：『杖折れちゃいました……………。』

テ：『折れた？なんで折れたんだ？お前の杖ってあれだろ？魔法界でも最高純度の《ブラッド・ルビー》と強度抜群で白銀に輝く《妖精の霊木》で作られたお前みたいな雑草女にはもつたない代物だつたはずだが……………そんな最強の杖がなんで折れたのか教えな……………。』

こいつ何でそんなに強い杖持つてんだ！？

リ：『はい……………あれはとてもいい天気の日でした。』

私はお友達と草野球をする約束をしていたのです…。』

だいたい想像できた。その後杖をバット代わりに使ったら折れた。みたいな事だと思う。

リ：『私のチームは結局負けてしまいました。僅差で負けた悔しさは想像以上でした。何かにこの怒りをぶつければ！そう思った時目に止まったのが……。』

テ：『《シルバー・ルーク》だったのか？』

首を縦に振るリーナ。

テ：『だがあの杖はたたき付けたくらいじゃびくともしないはずだが……。』

リ：『はい。私は困りました。この杖が折れないと私の怒りはおさまりませんから……。でも時間と共に怒りはおさまり、冷静になった私の頭にある疑問が浮かびました……。』（この杖どうしたら折れるんだろう）と……。』

馬鹿だこいつ……。

リ：『それから私は暇があれば壁や床などありとあらゆる場所にたたき付けました。でも杖は折れませんでした。私はだんだん杖に怒りを覚え初めました。それからたたき付けるだけでは無くテコの原理を利用したり魔法を当てたり爆薬で爆破したり……。』

（……………）

（……………）

俺もテリアスも沈黙している。

リ：『そしてついに杖は折れました。杖が折れた時私はとてつもな

い開放感に陶酔していました。また折りたい。この杖より強度がある杖を折りたい！と今でも思ってます。だから誕生日にお父さんに新しい杖を買って貰います。そして……………」

テ：『何考えてんだテメエは！お前みたいな究極完全体の馬鹿に教える魔法はねーよ！僕もう帰るからな！お前の話聞いてたら頭痛くなっただけ！』

テリアスは魔法陣へ何か言いながら飛び込む。もう一人は号泣している。

テリアスが帰って30分……………。
泣き止んだリーナが言った。

リ：『なんでテリアス怒ってたの？私、何か間違った言った！？』

お前の発言は全て間違ってたよリーナさん……………。

第17話：フランの悩みと昇格試験

フ：『はあ……………あいつ人使い荒らすぎ……………。ついでに無謀だし……………』

我が家で愚痴を漏らすフラン。

リ：『ご主人様が出来てよかったじゃんフロン』

いや、フロンじゃなくてフランだから……………。

しかし気になる……………ご主人様って何だ？

「ご主人様って何？」

リ：『えゝ勇くん知らないの！？フランの一族はマジ優秀な召喚獣ファミリーなんだよ！？まあ優秀なのはフランのお父さんやお母さんだけなんだけど……………プツ』

へー、フランって召喚獣だったんだあ。まあユニコーンだしぶっちゃけ有り得るけど……………。

フ：『あいつの馬鹿さ加減には本当に呆れましたわ！この前なんていきなり『今日は天気がいいからデュラハン討伐行こう！』とか言い出すし……………。』

【デュラハン】ってのはあれだ。全身甲冑で下半身が馬、上半身は人間、首無しの変な奴。

リ：『それでどうなったの！？討伐できたの！？』

フ：『できるはず無いでしょ……。だって作戦名が《当たって砕ける！努力すれば不可能だって可能になるさ！》だもん……。』

フランのご主人様はかなり頭が弱い人らしい。

《当たって砕ける！》の時点ですでに作戦じゃないしね♪

リ：『でもよく生きて帰って来れたね……。』

フ：『うん。だって相手素手だったもん……。私なんて角掴まれてぶん投げられたし……。グスン』

うわぁーこいつ玩具にされてたよ絶対。

リ：『じゃあ召喚主は？』

フ：『知らない……。気付いたら気絶してた。』

弱っ！こいつの召喚主！

リ：『まあ私とテリアスなら楽勝だっただろうね♪』

「お前とテリアスじゃなおさら無理だろ……。」

フ：『いいえ、リーナはともかくテリアスなら可能性はありますよ。』

リ：『そうだよーん♪テリアスは性格最低だけど実力はあるんだからね♪』

テ：『そうだぞ。僕たちヒューマン一族は相手の魔法を利用して攻

撃するカウンター魔法のプロフェッショナルだからね。」

いつからいたんだお前は!?

リ:『なんであんたがここにいるの!?!』

テ:『テメエ何寝ぼけた事言ってるの?もうすぐ【魔階級昇格試験】だぞ?明日が登録最終日だぞ?それをわざわざ教えに来てやったんだろが!?!』

リ:『もうそんな時期だった?すっかり忘れてた』

フ:『あなた……昇格する気あるの?』

リ:『失礼な!昇格試験なんて楽勝ですから』ねえーテリ阿斯?』

テ:『昇格試験は召喚獣の召喚は原則的に禁止だから一人で頑張ってくれ。』

リ:『でも昇格試験ってペアでやるんじゃないの?私だけ一人なんて不公平だよ!?!』

フ:『何言ってるのよりーナ……あなたにはとっても頼りになるパートナーがいるじゃない』

意味深な事を言いながら俺を見るフラン……。嫌な予感がするんだけど。

リ:『そうだった!私には勇くんがいるじゃん』頑張って昇格しようね勇くん!』

ふざけんなよ!?!魔法なんて使えねえー俺がそんな試験に出ても瞬

殺されるだけだから……。テ：『じゃあ明日の日没までに《雷の宮殿》で参加登録しとけよ。じゃあ用件も済んだし僕は帰るわ。』

リ：『くぅ〜ワクワクが止まんないよ!!』

俺は明日リーナやフラン、テリアス達のいる世界へ行く事になった。

はたして俺みたいな男がリーナを手助けできるだろうか？

今はなんとも言えない……。だが決まった事は全力でやる！

明日は早いとリーナが言っていた……。

俺は遺書を書いて静かに床についた……。。

第17話：フランの悩みと昇格試験（後書き）

次回から魔法の世界へ突入です！

第18話：丑三つ時の出発！！

リ：『オイッ勇樹はん！いつまで寝てんねん！さっさと起きんかい！！』

何なのこいつ……今何時だと思ってるの？夜中の3時だよ？

「君、今何時だと思っ……」

リ：『3時』

即答はきついね、流石に。

「そうですよ。今は午前3時なんです。今は草木も熟睡してる時間帯なんです。だから僕も寝ます。おやすみなさい。」

リ：『早く起きてよー！列車に乗り遅れたら即アウトなんだからね！』

列車！？どこに異世界と繋がる列車があるんだ？っーか眠い。

(……………)

リ：『起きてくれないならこれでもかっ！ってくらい大きい声で泣いちゃうからね……………。』

「起きますよ！起きれば満足かコノヤロー！」

リ：『うん、じゃあ早く着替えてね』あと30分しかないから』

(25分後……………)

俺とトンガリは自宅の前の車道にいる。人影なんてあるわけも無く小さな光の街灯が不気味に辺りを照らしていた。

「こんな所に列車が来るのか!？」

リ：『もうすぐで来るはずだよ』……………あつ、ほらあれ!!』

トンガリが真つ暗な空を指差しながら言った。……………いや、真つ暗な空から光がこちらに迫って来る。

瞬く間にそれは俺達二人の前に現れた……………。

先頭車両には大きな眼が一つ……………。それが俺達二人を見ている。

列：『久しぶりだなリーナよ……………』

リ：『久しぶりだね、Mr・トレイン』もう乗っていいの?』

ト：『うむ、早く乗リたまえ……………。』

Mr・トレイン……………そのまんまじゃん……………。

リ：『勇くん!早く行こうよ』

俺はこの列車に乗ったらどこに行くんだろう……………?
今の俺はかなりドキドキしている。
まあどんな所でもやる事は変わらない!
さっさとトンガリを昇格させて家に帰って寝る!

「よしッ、さつさと行くぞトンガリ！」

リ：『おお〜』

俺とトンガリはMr・トレインに乗り込む。

リ：『やっぱりトレインさんの中は快適だよねえ』

確かにMr・トレインの車内は快適だった。

車内なまさに豪華絢爛！！床には真っ赤ないかにも『高級ですッ！』
って感じの絨毯！天井には『俺より高値の奴は出て来い！』
みたいな雰囲気シャンデリア。

さらに吊り革は黄金に輝き『一般庶民が私に触れるなんて汚らわしいわ！』と言わんばかりの迫力だ！

こんな素敵な列車は他には無いだろうな。

リ：『ねえねえー勇くん！外見てよ！真っ暗だから』

そりゃそーだ。こんな時間に電気がついてる家なんてない。

「真っ暗な外見て楽しいか!？」

リ：『全然楽しくないよ？なんで？』

「楽しくないならなんで君はお外を見てたんだ!？」

リ：『気分…………。』

ト：『そろそろ魔法界への扉を開くぞ…………。準備はいいな?』

ついに来たぜこの時が！

俺はトンガリと眼を合わせて言った。

勇&リ

「『まかせろ！』」

第18話：丑三つ時の出発！！（後書き）

次回から《魔法界編》です！

第19話：炎の守護神・ワイバーン

黒く歪んだ空間がMr.トレインの目の前に現れた。
俺達を乗せた素敵列車はそこに入る。

(……………)

一瞬の出来事に我が眼を疑った。
俺の眼の前に広がる景色に……………。

そこにあるのは青空……………。広がる深い緑色の風景……………。
中世のヨーロッパを思い出させるような立派なお城……………。
空を飛び、火炎を吐き獲物を仕留める謎の生物……………。
「すげえ……………」

リ：『あはは、ワイバーンさんがまた狩りしてるよ……………』

俺達が乗る素敵列車に気付いたのか、さっきまで空を飛んでいた生物【ワイバーン】が迫ってくる。

「やばい！変な奴がこっちに来てるぞ！？」

リ：『大丈夫だよ、だってあれはワイバーンさんなんだからねえ……………』

いや、ワイバーンだからやばいん……

ガシャアアン！！

やばいだろこれ！ワイバーンが窓ガラスぶち破って来やがった！死んだ、俺達このワイバーンに喰われてしまっんだ……。

ワ：『ちい……。これだから窓ガラスは嫌いだぜ。』

リ：『またやってるよこの馬鹿ドラゴン！あーはっはっはっ！』

普通に喋りやがったこのワイバーン！

ワ：『それより久しぶりだなクソリーナ！さっさと《雷の宮殿》に行けよ！？インドラは気が短いのは知ってるだろ？』

リ：『だから今から行くんだよん♪それよりバーンさん、《炎の宮殿》にいらなくていいの！？』

ワ：『今日は仕事無かったような気がしたから抜け出して来た。』

リ：『そんな根性で守護神やんなよな……リヴァさんに言い付けてやる♪』

いつの間にかワイバーンは人間の姿になっている。

(……………)

なんで人間の姿になってんの！？

ワ：『それだけはマジ勘弁！言ったら怒るぜ？』

リ：『リヴァさんが助けてくれるからいいもんねーだ』

「質問してもいいですか？」

ワ：『おっ？あんただな？この自己中魔女に寄生されたかわいそうな人間ってのは？質問なんてしていいに決まってんじゃねーか！』
明らかに同情の眼で俺を見るワイバーン……。

リ：『人を寄生虫みたいに言っな！！』

怒るリーナはほっという俺は質問をする。

「なんで人間の姿になれるんですか？」

ワ：『これが俺達の本当の姿だぜ？さっきの姿は俺達みたいな守護神レベルの奴にしか使えない最上級魔法なんだよ。まあ才能があれば誰でも変身くらいは出来るようになるぞ？

でも俺達四人の姿は誰にも真似できねえよ。血筋ってやつだからな
！』

「じゃあ守護神って何なんですか？」

ワ：『守護神ってのは簡単に言えば領主みたいなもんだな。北に【水の宮殿】がある。そこにいるのが《リヴァイアサン》って言うおつかねえ女だ。……………』

だいたい理解できた。

この世界は東西南北それぞれに守護神がいてその人達がそれぞれに治安を守っているらしい。

北に《水の宮殿》 守護神：リヴァイアサン。

西に《雷の宮殿》 守護神：インドラ。

東に《風の宮殿》 守護神：シルフ。

南に《炎の宮殿》 守護神：ワイバーン。

と、まあこんな感じだ。

リ：『早くインちゃんに会いたいなあ〜』

このトンガリ帽子が言ってる『インちゃん』ってのはこれから行く《雷の宮殿》の守護神、インドラの事らしい……。『

こいつ何でこんなに馴れ馴れしいんだ？と疑問に思った俺の気持ち
を察してかワイバーンが答えた。

ワ：『俺ら守護神はリーナの両親と古くからの友人なんだよ。だからこいつが親の用事でよく俺らの宮殿に遊びに来てたりしてたんだよ。』

こいつの親って守護神と仲いいくらいすごい人らしい。

ワ：『オイッお前ら！今日は気分がいいからインドラの所まで乗せてってやるよ！〜』

リ：『やったぜ♪ありがとうバーンさん！』

ワ：『じゃあやるぜ！オラァァ！』

人間姿だったバーンさんは黄金の縦髪と真紅の体のワイバーンになった。

やべえ……カッコイイ！

俺とリーナはワイバーンに跨がる。

ワ：『しっかり捕まってるよ！』

俺はワイバーンの角を掴む……後ろからリーナが俺にしがみつく……。

ワ：『じゃあ行くぜ！』

パリイイイイイン♪

Mr・トレインの窓ガラスを突き破ってワイバーンさんは車外に出た……。

俺は怖かった……。

ワイバーンさんが窓ガラスを割った時に見てしまったのだ……。

Mr・トレインの狂気に満ちた眼を……。

第19話：炎の守護神・ワイバーン（後書き）

次回はインドラ登場予定です♪

第20話：甘党な守護神

俺達の目の前には巨大な宮殿が鎮座している。

雷雲に囲まれたこの建造物が《雷の宮殿》なのだろう。

ワ：『相変わらずすげえ雷雲の量だぜ、まったく。』

リ：『ガキの趣味はわかんねーぜ、なあ大将？』

リ＆ワ『だーはっはっはっはっはっ！！』

こいつらどんだけお気楽なんだよ。しかしインドラが子供だとは知らなかったぜ。

そうこうしてる内に俺達は《雷の宮殿》の目の前にいる。

巨大な石柱が見る者を威圧しているかのようなうだ。

ワ：『じゃあな二人共。頑張れよ！』

ワイバーンはそう言い残すと空の彼方へ消えて行った……。

俺とリーナは宮殿に入る。

宮殿の中はありえない空気で充満していた。

重い金属の扉を開けるといきなり甘い香り……。

「何だこの甘ったるい匂いは！？」

リ：『勇くん知らないの？インちゃんは大の甘党なんだよ♪』

うん、そんな個人情報知らないよね。しかし守護神が甘党とは以外

と言うかアホっぽいと言うか……。

リ：『おおーい、甘党守護神出ておいでっ！リーナ様に来てやったよっ！』

相変わらず偉そうなこいつを見るとこっちは不安になってしまう。

ピシアアアン

宮殿の奥から雷が飛んで来た！

？：『貴様、人の事を甘党とは失礼な奴だ！僕は甘党じゃない！超甘党だ！』

いや、そこはどうでもいいと思います……。

リ：『どっちも一緒』

？：『どっちも一緒だと？貴様の首撥ねたらああ……まさかお前リーナか？』

リ：『今頃気付いたの？インちゃんは相変わらず鈍感だねっ！』

奥の部屋から現れたこの小学校くらいの子供がどうやら《雷の宮殿》の守護神、インドらしい。

金髪に黄金の瞳の少年で一見おとなしそうな雰囲気の子だ。

だが服装は胸当て、箆手、腰当て、具足……まるで武士のような恰好だ。

リ：『インちゃんまた変な恰好だねっもうちょっと女の子らしくしなよ。』

イ：『うるさい馬鹿魔女！僕は女である前に武士なんだよ！』

(……………)

インドラは女の子らしいです。普通の恰好なら俺も女の子だと思うたかもしれない。

だがあの鎧姿に背丈ほどの太刀を背負う姿はまさに武士そのものだ……！

しかし自分から武士と名乗る所がすごい！！

武士が甘党ってどうなの？

リ：『それよりインちゃん！私なんでここに来たかわかる？』

イ：『昇格試験でしょ？受付最終日に来た馬鹿なんてあんたらが初めてだよ？』

リ：『えへへ』

いや、そこは照れるところじゃないでしょ！
つーか俺まで馬鹿扱いされてるんですけど！

イ：『あんたが参加するのはわかってたけど……今回の試験はかなり厳しいらしいよ？まあ私ならみんな秒殺だけどね』

秒殺！？命懸けか！？

リ：『邪魔する奴は皆殺し！みたいな！？』

普通に怖いからその発言……………。

イ：『それ最高！あはははは』

守護神が悪魔に共感してるよ……。

リ：『あはは♪私のせいで本当に死人が出たらどうする？』

イ：『お前ら二人共あの世行き♪』

リ：『ひい！』

「なんで俺まであの世行きなんだよ！」

イ：『えっ？そんなの気分が決まって………』

「ざけんなあああ！！」

イ：『ひい！』

インドラは俺が怒鳴ったので小さくなっている。

守護神ってこんな事でいじけていいのか？

俺達はさっさと参加を申請した。

試験は明日らしいので今日はこの宮殿に泊めてもらつ事になった。

リ：『明日が試験なんてワクワクするぜ。』

「俺はドキドキするよ。」

リ&勇

「『あははははは』」

俺はリーナと笑った。

だが俺は知らなかった。

この後リーナとインドラが巻き起こす修羅場に巻き込まれる事になるなんて……。

第21話：超軽量化仕様の……

事件は起きた……。

俺が今生きている事自体不思議な事かもしれない。
そんな事件が。

事件の弾きがねはもちろん彼女。
では今からその壮絶な修羅場を説明します……。

俺達は食事に誘われた。

イ：『さあ、好きなだけ食べていいぞ。』

かなり小さい鎧を着たインドラが言った。

すげえ……。

俺は目の前の光景に驚きを隠せない。

まずすごいのがテーブルだな。

映画とかでしか見た事無いすごい長いテーブル。

その上には一般人は値段を考えたらいけないんじゃないかと思うくらい高そうな食器類がたくさん！

料理もなんかすごい気合いが入ってる感じで見てるだけで皇帝かなんかになった気分！！

リ：『お菓子類が無い！？インちゃんに限ってそんな馬鹿な…………。』

驚くところ違うから。あとお菓子ばかり食べてたらもうインドラこの世にいないと思う。

イ：『甘党がお菓子ばかり食べると思ったか？これだから素人は困る。』

甘党に玄人がいると言う衝撃の事実が明かされた！

食事はとても賑やかだった。たわいもない話に三人で笑ったりもした。

しかし唐突に出たトンガリ帽子の一言で自体は一変する…………。

リ：『インちゃんの鎧ってすごく軽いんだよねー！超軽量化仕様だから防御力0だもんね』

「マジで！？あははははは」

楽しい食事に楽しい会話。最高にいい気分だなあ

……ん？

イ：『鎧を馬鹿にするなんてなんて無礼な奴なんだ！』

鎧の文句を言われてちよつと不機嫌気味なインドラ。

ちよつと可愛いかも……♪

リ：『だって事実じゃん♪ そんな鎧で武士を語るな愚か者が！ 貴様
は武士をナメてんのかあ！？』

なんで意味も無く挑発してんだお前は！！

俺はインドラを見た。

そして俺は凍り付いた。

さっきまで顔を真っ赤にして怒っていた表情はいつの間にか武士
のものに……。

百戦練磨の武将の魂がインドラに乗り移っているような気さえする
……。

これは流石にやばい！

イ：『貴様ら、死ぬ覚悟はできたか？』

(……………)

ら　　って何だ？　貴様ら　　って明らかに複数形じゃない？

今この場にいるのは俺、リーナ、インドラの三人。

んでリーナは殺されるらしい……………。それならあと一人は誰？

これは困ったなあ、まさかこの部屋には透明人間がいたなんて気付
かなかった。

現実逃避していた俺は我に帰る。

インドラは背負っていた太刀を引き抜き構えている。

(……………)

マジで殺る気じゃん！

刀に雷が走る！！

リ：『ちい、サムライソードとはやるな！！』

なんで欧米人風？

イ：『さあ、貴様も武器を出せ！これは男と男に真剣勝負だ！！』

いや、お前らどっちも男じゃないから！

リ：『そうまで言うなら殺ってやるよ！我らの死合に刮目せよ！！』

誰に言ってるんの君は？

ガキイイイイイン

インドラの太刀とリーナの箒がぶつかり合う！！

リ：『流石に鎧が軽いだけあってスピードだけはあるわね！』

イ：『フツ、第一筋のわりにださい箒しか持ってないな！』

鍔ぜり合い状態で相手の文句を言ってるよこいつら。

リ：『さっさと変身しな！この狛犬娘が！！』

ブチッ。

あっ、インドラ切れた。

イ：『狛犬だと！？貴様だけは殺す。』

インドラはまさに狛犬みたいな感じに変身していた。
これのぬいぐるみあったら絶対売れる！と思うくらい可愛い！
しかし実力はやはり最強クラスで

『喰らえ、【雷神撃・招雷咆哮波】』

ズゴオオオオン！

インドラの口から爆発的な量の雷がほとばしる！！

俺にしがみつきなから泣くリーナ。

自分の攻撃で自分の宮殿を半壊させたインドラも泣いている。リーナが防御陣を展開させていなかったら俺達は間違い無く消し炭になっ
っていたと思う……。

泣いている二人を俺はなだめなければならぬからタチが悪い。

一時間くらいして二人は泣き止んだ。

リ：『でもさっきの技は反則だったよぉ。死ぬかと思ったもん！』

イ：『だって本気で殺すつもりだったからな』

イ&リ『あはははは』

全然笑えないから！

この守護神怖い！！

リ：『明日の試合ってインちゃんを取り仕切るんでしょ？とっても楽しみだなぁ』

イ：『僕が考えた試験内容は【まさに地獄！どんな聖人でも悪魔に早変わりスペシャル】だからね』

(……………)

俺は正しかった。

俺は出発前夜にちゃんと遺書を書いた自分を褒めてあげた……………。

第22話：大暴走！！（前書き）

勇樹くん本気モードです！

第22話：大暴走！！

今日は試験当日。

今年は試合形式で試験が行われるらしい。

インドラが純粋な戦闘見たさに提案したらしくルールは単純。

2対2のタッグマッチ！

勝敗の判定は

【最後まで立っていたペアが勝ち！】

と言う単純明

白ながら恐ろしいルールだ。

試合会場は闘技場みたいな所で不気味な程静まり返っている。

こんな場所で試合をするとは………まさにグラディエーターにでもなった気分だ。

俺達の対戦相手はすでに決まっている。

リ：『あいつら強いから気を付けてね！』

「まかせとけ！あんなへなへなピーマン共なんて俺達《最凶ペア》にかかれば瞬殺だぜ！」

実際に試合会場に來るとテンション上がる。

イ：『次の対戦は《リーナ&勇樹》ペアVS《ザイル&マイラ》ペアだ！さっさと準備しろのろま共！』

守護神って言葉遣い荒いね。なんかむかつくよ。

まあいい、死合開始だ！

ザ：『この勝負は俺らの勝ちだな！だって相手が《魔法も使えねー
ド素人》と《ピーー歳にもなって色気0のまな板魔女》だからな！』
勇&リ『「殺す！！」』

試合開始直後いきなり挑発かますクソ野郎。
そしてそのクソ野郎を殺すと誓い合う俺とリーナ。

マ：『どこ見てんの君達』隙だらけだよ！喰らえ【ブレイク・アロ
ー！】！』

ハッ、んなもん避ければいいだけなんだよ……ひょいと♪
俺が光る矢を避けると壁に当たって爆発した！
どうやら魔力で出来た矢らしい。

ボオン、ズゴオン、バガアン！

爆音と共にリーナが吹き飛ぶ！！

リ：『はあはあ……当たってあげただけ……だもん……。まだま
だ余裕だよ……。』

いや、お前かなりダメージ受けてるだろ。

っーが強がる前にまず立ち上がったね……。

ザ：『だーはっはっはっ！直撃かよまな板魔女！じゃあ俺の技でおねんねさせてやるよ！【ブラック・ナパーム】』

挑発されてもリーナは立ち上がらない。

これはやばい！！

俺はリーナに飛び付き漆黒の手榴弾からリーナを守る！！

バアアアアアアン

ちい、もろに直撃喰らっちゃったぜ。

だが俺の身体は動いた。身体中が痛い……しかしこのザイルと言うクソ外道を許せない……この感情は何だ？わからない……。一つだけわかってる事、それは――

「テメエら、ぼろ雑巾にしてリーナに土下座させてやるよ……。」

ザ：『強がるなよ！？魔法も使えねー奴に俺らが負けはずねーだろ！』

挑発は無視。俺の頭が冴えてきた。邪魔な思考は削除……。

さあ、始めようか……。

俺は地面を蹴る。

俺の真横を光の矢が通り過ぎる。

眼の前にはマイラ。

ははっ、そんなに驚くなよな。

バキッ！

俺はマイラを殴る。

こいつは気絶程度で許してやろう。

ザ：『なにッ！？マイラが一撃で！？』

「魔法も使えない奴にびびってんのか？」

ザ：『いい気になんなよ！喰らえ【ブラック・ナパーム】！』

挑発に乗っちゃて可愛い奴だ。しかし芸が無い奴は嫌いだ。

俺は意味も無く黒い手榴弾をサラッと避ける。さあてそろそろ殺るか。

バキッ、ドカツ、グシャ！

たったの三発で倒れんなよな雑魚が。

馬乗り状態で俺はザイルに言う。

「さつさとリーナに土下座しな。そしたら許してやるよ。」

ザ：『ふざけんな！』

ははは……………こいつ、覚悟は出来てんのか？

うーん、気絶しちゃった。私の不注意で勇くに迷惑かけちゃった……………。

後で謝らないと。

でもなんで私まだここにいるんだろ？もうとっくに負けてるはずなのに……………。

……え？

なんでマイラが倒れてるの？

勇：『お前は外道だなザイルさんよ。倒れてる女の子に追撃なんていい根性してんじゃねーか！？何とか言えよ！！』

あれって勇くん？

なんかすごい迫力なんだけど……。

あつ、ザイルも気絶しちゃった。

勇くんが私に気付いて言った。

勇：『おつ、起きたかりーナ！お前に酷い事した奴らはぶっ飛ばしたぜ♪』

えっ！？勇くん、私のために戦ってくれてたの！？

やばいよ！今の私顔が真っ赤だもん！自分でもわかるくらいに……。

この感情って何なの！？

(……………)

これってもしかして……違う違う！そんなんじゃない……よね？

俺は今インドラに大絶賛されている。
俺の戦闘能力に興味を持ったらしい。

リーナはさっきから顔を真っ赤にしている。

そんなに一発で気絶したのが恥ずかしかったのか？

明日の試合に勝てば昇格できる。とインドラが教えてくれた。

明日の対戦相手はかなりの猛者らしい。でも負けるわけにはいかねえよな！

さっさとぶっ飛ばしてリーナを昇格させてやるとするかな。

第22話：大暴走！！（後書き）

次回の相手はあの二人です！！

第23話：まさかの強敵（前書き）

今回はリーナ視点です♪

第23話：まさかの強敵

昨日はなんか一日中ドキドキしてたなあ。
そのお陰で今日は睡眠不足気味だもん♪

勇：『これに勝てば昇格だな！ところで俺達の相手って誰なんだろ？』

今日は勇くんも殺る気満々だね♪
でも本当に対戦相手が気になるよお。

イ：『次の対戦は《リーナ&勇樹》ペアVS《レオン&フラン》ペアだ！さっさと始めろ！』

口悪いなあインちゃんは！今度お仕置きが必要だよね♪

勇：『なんでフランが出場してんだよ！召喚獣は参加できねえーんじゃないのか！？』

勇くんがインちゃんに質問してる。

イ：『差別は駄目なんだぞ？知らないのか？』

うん、差別は駄目だ！

このままじゃ勇くんが《差別男》の烙印を一生背負って生きる事になっちゃう！

「勇くん、差別は駄目だからね！！」

勇：『はい、ごめんなさい。僕が間違っていました。』

素直な勇くんは可愛い♪

フ：『さっさと準備して下さいな。砂山コンビさん♪』

フランめ、私達が砂山に埋まった時爆笑してやがったらしいな？
ここは格好よく決めないとね♪

勇&リ『「殺す!!」』

あはは♪勇くんも私と同じ考えだったんだね♪
なんか最近私達って息ピッタリだね♪

レ：『よしッ！フラン、あの作戦で攻めるぞ!!』

フ：『作戦ってまさか「撃って撃って撃ちまくれ！そのうち当たるさ、運任せでも勝ち」は勝ち!!」の事ですか？もしそれが作戦なら一回死んで下さい♪』

ダサッ！あんなセンスない作戦は初めてだよ!？

「勇くん！私達もあの作戦で行くよ!!」

勇：『作戦ってまさか「全力出せばそれでよしッ！勝負なんて所詮時の運だから」の事か？こんなの作戦じゃないから!』

勇くんはまだまだ甘いなあ。

この作戦名聞いて闘志が湧かないなんて……。

フ：『ボサッとしてると怪我しますわよ？【氷魔・ツンドラの咆哮】
』

うわぁーすごい！氷の柱が地面からどんどん出て来る♪綺麗だなあ

♪

勇：『オイッ馬鹿、避ける!』

えっ？

(……………)

やばい……氷の柱が迫って来てるよ!？

「防御陣、【絶対領域・リーナの部屋】発動!!」

ふふーん♪甘い、甘いよフラン。

もうあんた達に勝利は無いからね♪

だって……レオンって人気絶してるよ？

勇くんが倒したんだね♪

さすが私の勇くん、頼りになる♪

フ：『ちよつとレオン!？あんた負けるの早過ぎですわよ!この役立たず!!』

ふふふ、よそ見なんてしちゃ駄目だよ？

隙だらけになっちゃうからね♪

「隙ありい!これでも喰らええい!【ミッドナイト・クレイモア】

♪

私を作った魔力の玉がフランに直撃い♪

小さな爆発が連続で発生するこの技は一度喰らえば脱出不可能な極悪技なんだよ♪

バタッ…………。

フラン撃沈！

やったね、私！

(……………)

これってもしかして……………勝っちゃた！？

勇：『おい、俺達勝っちゃたんじゃねえーか！？』

信じらんない！まさか勝てるなんて思ってたから……………。

「ゆ、勇くん、私達勝ったんだよね？じゃあ私……………昇格……………かな？」

イ：『《リーナ&勇樹》ペアの勝ちだな！よしッお前ら昇格だな！僕のとこまで来な。』

今、私の帽子には翡翠色のバッチが付いてるんだよ♪これが【6級魔術士】の証なんだって♪

勇：『以外に似合ってるぞリーナ♪つーか早く帰ろうぜ！さすがに学校二日も無断欠席だとやばいだろ？』

キヤー！勇くんが似合ってるって言ってくれたあ♪
嬉しいな♪

もう学校なんてどうでもいいよあ♪

「無断欠席は大丈夫だよ！校長が上手く隠蔽してくれるから♪」

勇：『校長がかわいそすぎだ。』

なんて事言ってる。 あははは、私も勇くんの事考えてたら早く帰りたくなっちゃた♪

ここが故郷の私が言うのも変な話なんだけどね♪

勇：『おい！Mr・トレイン来たぜ！さっさと乗らないと置いてかれんぞ！』

「はぁーい♪」

私は元気に返事をしてMr・トレインに飛び乗った。

第24話：ゲームに夢中！？

「ちい、囲まれた！リーナ、援護してくれ！」

リ『まかせて！えいッ』

「うわぁー俺がいるのに手榴弾投げん……………」

ボオオオオオオオン

死んでしまった。

今俺達はゲームをしている。

なんか面白いらしく買ってしまったのだ。

オンライン対応でジャンルは主観視点型のシューティングゲーム。
ファースト・パーソン

30人以上で対戦できるらしくまさに戦場は爆風と断末魔がこだま
する修羅場！武器も豊富で竹槍から謎の光学兵器まである。

「リーナ！仲間の援護に行くぞ！邪魔する奴は《蜂の巣》だ！」

リ：『OK』ちよつと勇くんそこ邪魔！』

ダラララララララ！

リーナのキャラが持っているマシンガンから飛び出した鉛玉が俺の
キャラを容赦無く《蜂の巣》にする。

仲間からチャットが入る。

《敵撃破しました！今から援護に行きます。》

顔も知らない奴がこんなにも頼もしいとは思わなかった。

俺達が戦っている場所は廃ビルが立ち並ぶ不気味な場所で、スナイパーがありえないほど潜んでいる。

故に無策に歩き回る奴はすぐにあの世行き……。

しかしリーナは

リ：『くたばれ！味方なんて関係ないんだよ！私が神だ！逆らう者には死あるのみ！！』

と、たまたま拾った【マキシマム・ブラスター】と言う連続で超破壊力を持つエネルギー弾を撃つ最強兵器で味方もろとも吹き飛ばしている……。

《プレイヤー2が倒れました。プレイヤー4が倒れました。プレイヤー8が……。》

リーナの撃つエネルギー弾で次々と戦死するプレイヤー達……。俺は暴走状態のリーナを止めるためにある秘策を作った…。

「リーナ！俺と合流してくれ！敵本拠地を叩くぞ！」
そして俺とリーナはすんなり合流。

リ：『勇くん、早く突撃しようよ』

パアン、パアン、パアン。

《プレイヤー13が倒れました。》

リ：『ちょ、ちょっと何してんのよ勇くん！？気でもおかしくなったの！？』

「お前の暴走を止めたただけだ！！悪く思うな。」

死んでしまったキャラは所持武器がピストルだけの状態で復活する。

そして仲間からチャット。

《ナイスですプレイヤー6さん！！》

リーナの凶弾で死んだかわいそうなプレイヤーが俺を称賛する。

リ：『ちよつと勇くん！本拠地が危ないよ！？本拠地が落とされたら負けなんだからね！！』

「マジか！？救援にいくぞ！」

リ：『間に合わないかも！ここは私達だけで敵本拠地を潰そうよ！』

確かに自軍本拠地からかなり遠い場所にいる俺達では救援に行くより目と鼻の距離にある敵本拠地に攻めたほうがいいかもしれない。

だが俺もリーナもあと一回死んだら戦場離脱してしまう。

しかも武器は俺がショットガン、リーナがボウガンと手榴弾。

敵もある程度本拠地を守る奴がいるだろうからこれは無謀な突撃としか考えられない。

だがここで攻めなければ負ける！！

「行くぞリーナ！俺達で敵本拠地をぶっ潰すぞ！」

リ：『それでこそ私の勇くん、英雄になるのは私達だけだもんね！』

ダラララララララ……

やっぱりガードが固いな。敵の守備も俺達の本拠地が落とされるまで全力で迎撃してくる。

くっ、物影に隠れている場合じゃねーのに！

ボオオオオオオン

何だ！？いきなりの爆発……………。

リ：『敵は怯んだよ！さあ反撃開始だよ！』

どうやらリーナが敵のリロード中に手榴弾を投げたらしい。

「ナイスだリーナ！」俺とリーナは物影から飛び出す！俺達を阻止するために敵が攻撃してくる！

だが突然の奇襲で混乱した敵の守備陣は全く統率性が無い。

俺はショットガンで、リーナはボウガンで敵を次々と仕留める！

あと少しで敵本拠地が落とせる！と思ったその時――

《自軍本拠地が制圧されました。》

(……………)

(……………)

勇&リ

「『ふざけんなああああ！』」

俺達は仲間に称賛された。二人で敵本拠地に乗り込み制圧寸前まで行ったんだから信じられない！

みたいな感じ。俺は褒められて嬉しかったがリーナは

リ：『仲間が必死になって攻めてたにも関わらず本拠地を守りきらなかったあんた達のふがいなさの方がよっぽど凄いわよ！』と言う文句を仲間に送信しようとしたので俺が必死になって止めた。リ：『あゝもう、納得できない！勇くん、もう一回やるよ！』

「はいはい。」

そして俺達はまたコントローラーを握った。

第25話：降水確率と傘（前書き）

今回は学校が舞台です！

第25話：降水確率と傘

今日は学校だ。

リーナは天気予報を見ている。

リ：『勇くん、今日の降水確率は80%らしいよ。』

『じゃあ傘持っていないとな!』

リ：『はあ?』

『はあ?』じゃねーだろ。雨降るなら傘持ってく。これ常識。

『いや、雨降るんなら傘がいるだろ?』

リ：『降るとは限らないでしょ!?残りの20%に賭けて傘持って行かないのが常識でしょ!?』

何考えてんのこの子?降らない可能性に賭けて外出するなら傘の出番一生来ないじゃん…………。

リ：『とにかく傘の使用は禁止だからね!わかった?』

『はいはい。』

俺達は家を出た。

空は雨雲だらけでいかにも『雨降らします!』的な雰囲気…………。

『これ絶対降るぞ?やっぱり傘が…………。』

バキッ！！

リ：『いい加減にしてよ勇くん！傘に一生頼る人生がいいの！？私、そんな勇くんは嫌いだからね！』

なんで俺は殴られたんだ？傘に一生頼る人生って何だ？あとなんでこいつ涙目なの？

まあいい、傘は諦めるか…………。

「傘なんているかボケエエエ！降るなら降れや！俺は負けねーぞ！！」

自分に気合いを入れる。

リ：『さすが勇くん♪かつこいいぜ！』

（１０分後）

ザアアアアアア

やっぱり降った。しかも学校までまだ最低２０分はかかる…………。俺とリーナは案の定びしょ濡れ状態。

リ：『あはは…………降っちゃったね。』

「ああ、降ったな……。」
もう俺達は走って学校へ行く気にもなれずいつも通りのスピードで学校へ行く事にした。

学校で俺達は担任にずぶ濡れになった理由を説明した。

大爆笑する担任を見て大失笑する俺とリーナ……。

今日一日この恰好で過ごすのはさすがに気が引ける。

一限目は国語。

リーナは早速机の上で爆睡している。

いい根性してるぜこいつ。国語の教師は最高にうざい事で有名だからな。

教師：『リーナさん、一限目から居眠りするんじゃない！』

バシッ！

リーナの頭を教科書で叩く国語教師。目を覚ますリーナからは殺気……。

俺は目を背ける。あの教師に同情するしか無い。

リーナがおもむろに携帯電話を取り出し電話をかける。

教師：『学校への携帯電話の持ち込みは禁止ですよ！没収します。』

リーナは無視している。

しかし誰に電話したんだ？この状況で電話なんてありえないだろ！？

リ：『あつ、校長？リーナだけど………うん、なんか国語の先生

が証拠写真よこせて言ってくるんだよねえ。早く助けてくれないと私、……………」

ガラララッ

校長が来たよ……………」。

校長：『ちよつと君！生徒を脅迫するとは何事かね！校長室に来なさい！！』

教師：『何の事ですか！？私は脅迫なんてしてません！！』

かわいそうな国語教師は強制連行された……………」。

リーナは満足したのか教科書を読んでいる。

(……………)

なんで授業中にそれをしないんだ！？

俺は怖い。隣の席にいるこいつはこの学校で事実上最強なのだ……………」。

リ：『人がふて寝してる時に起こすなんて最低だよ！勇くんもそう思うでしょ！？』

私事で教師を追放する方が最低だが話を合わせないとまたこいつの毒牙の餌食になる奴が出て来る。

「全くだ！あいつは常識知らずにもほどがある！！」
リ：『だよねえ』やっぱり勇くんはわかってる！！」

他の授業はいたって平和だった。

リーナが校長を召喚するのは機嫌が悪い時くらいで普段は普通に勉強している。

リ：『やつと昼休みだね♪勇くん、お昼ご飯食べようよ♪』

「そっだな！」

俺達の昼休みはだいたい二人で下らない話をしている。

リ：『それでね、この前なんて勇くん大切にしてるお皿が綺麗に真つ二つになったんだよ！あははは〜♪』

「やっぱりあれはお前が犯人だったのか！！帰ったら覚悟しとけよ？」

リ：『嫌だよ〜♪逃げるが勝ちって言うからね！だから逃げるんだもん♪』

「どこに逃げるんだ？」

リ：『あ………………。』

やっぱり計画性0だなこいつ……………。

まあそれがこいつのいいところなのかも知れないけどね。

キンコーン……………

昼休み終了のチャイムが鳴った。
午後の授業はなかなか辛い。
五時限目は物理。

リ：『あゝあ、昼休み終わっちゃったね。次って物理でしょ？勇くん、起きてられる可能性は？』

「9・7%だ。」

リ：『あはは♪私は0・4%だよ♪』
ガラッ

教室に物理教師が入って来る。

俺とリーナは一瞬でも気を抜けば夢の世界に旅立つ状態……っーか
クラスの大半がその状態だ！

起立して挨拶を済ませると強烈な睡魔が襲い掛かる。

リ：『勇くん、私はもう……無理………だよ。』

そう言い残してリーナは静かに夢の世界へ旅立った。周りを見渡すとリーナの他にもすでに夢の世界へ行った輩が数人いる。

(……………)

お前ら早いな……………。

まだ授業が始まって5分くらいしか経ってないのに……………。

横のリーナを見るととても幸せそうな表情で寝ている。

やばい！俺もそろそろ限界だ……………。

俺は静かにまぶたを閉じた……………。

六限目は体育でランニングやら体操やらをしている。今日は自習らしいので予備の担当教師がいなくなると全員適当に好きな事をしている。

俺とリーナはもちろん体育館のステージでお昼寝をする事になった。

帰りのホームルームも終わって俺達二人は下駄箱で空を見上げている。

雨はまだまだ止む気配すら無い。

「走って帰るぞ！いいな！？」

俺はリーナに言う。

リ：『どうせ濡れるんだから歩いて帰ろうよお。』

なんだそのやる気の無い返事は！？俺まで今『それもそつだな』みたいに思っちまったじゃねーか！！

「風邪ひいても知らないからな……………」。

リ：『勇くんがおんぶしてくれるなら走ってもいいよー』

俺がおんぶしたらお前は走らなくていいだろ！

「じゃあ歩いて帰るか」

リ：『ええー、勇くんのいじわる、ろくでなし、役立たず！』

バシッ！

リ：『勇くんが叩いた！女の子叩くなんて最低野郎だぁー！』

「つべこべ言わずさつさと用意しろ！！早く帰らねーとお前が楽しみにしてた【テレビ初の快拳！宇宙人の私生活に完全密着SP】が始まるぞ！？」

リ：『それはやばい！勇くん、ダッシュで帰るよ！』

そして俺とリーナずぶ濡れになる覚悟を決め下駄箱を勢いよく飛び出した。

第26話：争い事は大嫌い！！

今、我が家には召喚獣のフランとその召喚契約者のレオンが遊びに来ている。レオンとは昇格試験の決勝で戦っただけで面識がほとんど無い。だがレオンは俺の事をよく覚えているらしい。

レ：『いやあゝあの時はまさに激戦でしたね！勇樹くんも大分苦戦してませんでした！？』

うん、苦戦なんてしてない。だってこいつは俺の【殺人ミドルキック】で昇天してたからな。

フ：『あの試合はレオンさえいなければ絶対勝ててましたわ！』

レ：『なんだと！？フランだって強そうな名前の技出しておきながら当たらずじまいだったじゃん！』

バキッ！

フランの見事な正拳突きがレオンにヒット！！

フ：『あんななんて魔法すら出さずにくたばってたでしょ！』

リ：『雑魚二人で揉めんなって。お前らどのみち負けたんだから…
…フッ』

この挑発は【火に油を注ぐ】なんてレベルじゃない。例えるなら【ニトログリセリンが入った容器をハンマーでぶん殴る】くらい危険な挑発なのだ。

だつてフランの角が……。

フ：『いっぺん死ぬかあ！？殺してほしいんだろ！？よし、今から殺してやるから動くな……。』

リ：『上等だよ！あんたのそのだつさい角を私が素敵にコーディネートしてやるわー！』

ああ、始まった……。

俺とレオンは居間から緊急非難を開始する。

なんか凄い音が聞こえる。家が破壊される音……。何も出来ずに震える俺とレオン……。

レ：『あの二人を止められる人なんてこの世にはいないんだ……。勇樹くんも今の内に死を覚悟したほうがいいですよ……。』

妙に説得力あるな……。

でも俺はあの二人の争いを止めて家を守る義務がある……。

俺の覚悟を決め戦場へ赴く表情を察してレオンが止めに入る。

レ：『勇樹くん駄目ですよ！？命は大切にしましょうよ！……』

俺はレオンの肩に手を置き言った。

「骨は拾ってくれよ？」

レ：『勇樹くん駄目です！本当に……。』

レオン、俺は最期にお前と言うべき理解者が出来てよかったよ、さようなら。

俺は居間へと続く扉を開ける。

「テメエら人の家をこれ以上壊すな！ぶっ飛ばすぞコノヤロー！！」

リ&フ：『邪魔すんなボケエエエ！！』

こいつらコワッ！！二人とも頭から流血してるよ……………。
だがその恐怖感はすぐに吹き飛んだ……………。
何でかって？

そりやこの部屋の有様を見れば誰でもキレるさ……………。まず床に開いた大きな穴。そして粉々になった窓ガラス。

俺の部屋に繋がる扉付近はバズーカ砲でもぶっ放したのかと思うくらいに崩壊している……………。

それに加えこの前買い直したばかりの備品類、全滅。

「お前ら二人は死刑じゃあああああ！！」

リ&フ：『上等じゃねえかクソヤローが！！』

(……………)

いつの間にか二人の標的が俺になってるのは気のせいだろうか？
いいや、気のせいじゃない。

殺気を放つ悪魔共が俺に飛び掛ってくる……………。

俺は容赦しなかった。

いや、正式には出来なかった。

《油断＝死》の方程式が俺の頭の中で完成したからだ。

俺は全力で二人を迎撃した……。

リーナはなぜか俺に攻撃はして来なかった……。

だがフランは全身全霊を込めて俺に魔法をぶっ放して来た。

俺は何回もぶっ飛び、壁にたたき付けられた。

俺もさすがに女の子を殴る事は出来ず攻撃を避け続けるだけだったが俺の生命の危機を察知したリーナ＆レオンが暴走状態のフランを撃破した……。

まあ実際レオンは居間に入った瞬間にフランの魔法が直撃し、そのまま気絶していたけど……………。

二時間くらいしてフランが目を覚ます。

フ：『ごめんなさい勇樹さん…… お家をボロボロにしてしまっ……グスン。』

「今回はリーナが悪いですから気にしないでいいですよ。ほら、リーナもフランに謝りなさい。」

リ：『ごめんなさいフラン。』

二人を仲直りさせた俺を見ていたレオンが涙を流しながら言った。

レ：『この二人を仲直りさせるなんて…… 勇樹くん、あなたは神で

す！
』

「ははは、そんな大袈裟な事じゃねーよ。さっ、仲直りもした事だし、お前ら、家の修理が待ってんぞ」

リ：『修理なんてしなくてもこんな立派なお家なら不自由なく生活できるよ？だから修理は無し』
』

フ：『レオン！デュラハン討伐に行きましょう』
』

レ：『そうだね』
』

「ふざけんなああ！さっさと準備しやがれ！！」

リ&フ&レ：『了解です！隊長！！』
』

第27話：息抜きに全力投球♪

今、俺達四人は公園にいる。

壊滅状態だった居間をある程度片付けた俺達は息抜きがてら、公園に散歩に来たのだ…………。

リーナとレオンは砂山で山脈を作っている。

リーナの頭の中にはすでに《砂山生き埋め事件》の悲劇は無くなっているらしく、レオンと穴を貫通させるために頑張っている。

俺の横でベンチに座るフランは砂山が崩れるのを今か今かと待ち構えている。

(…………)

リーナがもぞもぞと砂山から這い出しながら

リ：『レオン、あと少しだから頑張って！』

と言いながら妙に爽やかすぎる笑顔を見せる。

リーナは俺に振り返り笑った。

そして…………

ゲシッ！

蹴りを一発…………。

ドシヤアアアア

崩れる砂山脈に埋まるレオン。

レオンを救出するために立ち上げた俺の腕をフランが掴む。

フ：『今が一番いいところなんですから救出なんて不粋な事はしないで下さいね♪わかりました？』

もはやレオンの身体は踵以外は埋まっている状態。
もがいているのかすらわからない。

リ：『レオン頑張ってえ〜！応援してるから♪』

フ：『頑張って化石になって下さいねレオン〜♪』

こいつら外道だ……。

レ：『お前らなんて死んじゃえ！！』

激怒するレオン。

俺が救出しなければ間違い無くあの世へ旅立っていたはずだ。

フ：『生きてたなんて本当に残念ですわ……。』

何言っちゃってんのこいつは？

リ：『大丈夫だよフラン、まだチャンスはあるから。』

いやいやいや、変な助言しないでいいから君も。

レ：『お前らふざけんなああ！』

レオンが二人を追い掛ける。逃げる外道共。いつの間にか鬼ごっこが始まっている……。

レオンがパタパタと俺に向かって走って来る。

俺の肩に手を置いたレオン。そして一言。

レ：『はい、タッチ！勇樹くんが鬼だぞ！逃げろおおお！！』

(……………)

俺も参加してたのか？

いつから？だって俺普通に座っても誰も追い掛けて来なかったよ？

(……………)

わかったぞ。俺は謀られたんだ。俺を放置する事で油断させ、どうしても二人を捕まえられなくなった時の保険用として残しておいたのだ！

やるじゃないか、策士共め……………。

俺は立ち上がる。

見てろよデメエら。

はあはあ、疲れた……。俺達はいいい年して全力で鬼ごっこをした。全員が運動会のリレー並に本気で走っていた。

もちろんそんな本気走りをするすぐにバテて一時間くらいしたら全員へ口へ口状態でなんともグダグダな鬼ごっこになっていた。

しかし誰も止めようとはしなかった。

いや、『止めよう』なんて言えなかった。

もしあの場で『そろそろ止めよう』宣言を出したらそいつは間違い無く笑いにされる。

みんなそれが怖かったのだ。

その結果、一人、また一人と力無く倒れて行った……………。

今思うと馬鹿すぎて笑うしかない。

四人のいい年した奴らが地面に寝転がり笑い合う姿を見た買い物帰りの奥様が冷たい視線を送って来たがそんなの気にしない。

わいわい言いなが帰路に付く俺達四人。

リ：『あそこでレオンを殴にしてたら……………。』

レ：『僕を殴にする気だったのか!?!』

フ：『あそこでレオンがくたばってれば……………。』

何に後悔してんだフラン……………。

レ：『………………。』

レオンは恐怖に満ちた顔でフランを見上げる。
それに優しい笑顔を返すフラン。

フ：『……………うふふ♪』

レオン硬直。

いつの間にか家に着いている。

リ：『今日は楽しかったねー♪』

リーナの言葉に適当に相槌を打って俺達は家に入った…………。

今からあれやんの？……………無理だ。息抜きで全てのエネルギーを使った俺達に家の修理なんて不可能です！！

リ：『はあ、今から修理は辛いなあ……………。』

フ：『でも頑張って片付けましょ♪』

レ：『みんなでやればすぐに終わるよ！』

「今日は無理！疲れた。修理は明日でいいな。」

お前らも今日は休みたいだろ？俺って優しい。

リ&フ&レ：『ふざけんなああ！人がやる気出してんだからお前もさっさと準備しやがれ！！』

何でこんなにやる気に満ちてんだこいつら！？

「今日は寝ま……………」

リ&フ&レ『いい加減にしろ!~!』

「へいへい、わかりましたよ。やればいいんだろ!~? やってやろう
じゃねーか、かかって来いやあああ」

リ&フ&レ『うるせえんだよデメエはああああ!~!』

お前らも十分うるさい……………。

第28話：スナイパーとグレネード

今、俺はニット帽を深めにかぶり、サングラス&マスク姿です。
そして黒ローブ&トンガリ帽子を自慢げに着こなす魔女と街を歩いています。

なんでかって!?

じゃあ説明します……………。

(一時間前)

俺は制服に着替える。

今日は学校だから当然と言えば当然だな。

いつもならとつくに着替えているリーナはまだパジャマ姿。

「さっさと着替えるよ。遅刻すんぞ!」

リ：『勇くん、今日はお休みだよ?』

今日は火曜日で普通に学校はある。

こいつがサボる気満々なのはよくわかった。

「サボる気か?じゃあ俺が担任に言っというてや…………」

リ：『あつ、井藤先生ですか?今日勇くんが風邪ひいたんで休みます。』

受話器を置いて不気味に微笑むリーナ。

担任に連絡するとは。しかも俺まで道連れ…………。

(……………)

ちよつと嬉しかった。

学校サボって家でごろごろするなんて久しぶりだよ。

リ：『勇くん早く着替えて！せっかくサボったんだから遊びに行くよ。』

「はあ！？知り合いに見られたらどうすんの！？家でごろごろしてればいいんだよ。」

リ：『見つかるわけじゃないじゃん！変装すれば大丈夫だよ。』

変装？ちよつと楽しそうだからやってみるか……。

変装終了……………。

俺は《強盗スタイル》で家を連れ出される。

リ：『我ながらいいできた！勇くん最高にパンチがきいてるよ。』

はは……………まさか強盗姿を褒められるなんて夢にも思ってたよ。

しかしどこに行く気なんだこいつは？

こんな姿で外を歩くといつか職務質問されるぞ？

「今からどこ行くんだ？」

リ：『そんなの適当でいいじゃん』』

リ：『あそこで遊ぼうよ』』

リーナは俺を引っ張りながらゲーセンへ入って行く。俺達が入ったゲーセンはかなり大規模でいろいろな種類のゲームがある。

最新のゲームもあればお祭りの屋台とかでよく見かける射的まである。

(……………)

射的はさすがに予想外だったな。リーナも射的コーナーを見て大爆笑……。

リ：『なんで射的があんの！？意味わかんない！あははははははは！』』

完全に射的を馬鹿にしてる俺達を見た射的コーナーの店員が俺達に言った。

店員：『射的を笑うとはいい度胸だ！！お前ら、俺と勝負しやがれ！』』

なに、この人。制服姿にハチマキってどんなセンス？しかもハチマキに【醤油風味】って書いてあるし……………」

リ：『勝負だあ？舐めんなよ醤油風味が！私はここいらじゃあ【スナイパーリーナ】の異名で通ってたんだよ？』

そんな異名聞いた事無い。しかし醤油風味は『やっと強敵に出会えた。』みたいな感じで満足そうにしている……………」

店員：『フツ……………スナイパーでは俺には勝てない。何せ俺の異名は【グレネード白崎】だからな！！』

いや、コルク弾でグレネードはさすがに無理だろ。つかこの店員態度悪すぎだよ……………」

リ：『グレネードですって！？いい勝負になりそうね……………」』

店員：『フツ、甘いぜ……………俺は今まで誰にも負けた事がないんだぜ？お前みたいなチンチクリンに負けるはず無い！』

リ：『……………」』

カチャ。

店員：『うわっ！？人に向けんな！！危ないがろ！』

リーナは店員から賞品に照準を合わせる。

パン……………」

リーナはコルク弾では落とすの絶対無理！みたいな巨大なウサギみたいな人形を撃った。

コルク弾は人形の頭に当たったが全く動かない！

【グレネード白崎】は無難にキャラメルを狙っている。

パン……。

グレネード白崎の撃った弾はキャラメルにかすりもせず撃沈！！

パン……。

パン、パン……。

パン、パン、パン、パン、パン……。

いつの間にか【スナイパー】と【グレネード】は 狂ったようにコルク弾を乱射している……。

自分の狙った賞品を落とせず、ムキになっているのがよくわかる……。

リ：『くっ、グレネード！私に力を貸して！二人であのクソウサギを落とすのよ！！』

白：『しかたない、俺の合図で撃つぞ、スナイパー！』

いつの間にか友情が芽生えてるよ、こいつら。

おめでたい奴らだなあ……。俺がこの二人のお気楽度に感心していると【グレネード】が合図を出した。

白：『撃てーーーーー！！』

パアアアン！
パアアアン！

リ：『あーあ、あのクソウサギ落とせなかったなあー。今度は勇くんもやろうね』

「ははは、俺がやったらあんなウサ公瞬殺だぜ！」

リ：『本当かなあ？勇くんの場合一発も当たらないかもよ』

「んだとお！？」

リ：『あはははは、勇くんが怒った』

(……………)

たまにはこんなのも悪くないな……。

リーナと俺は二人並んで歩いている。

まあ恰好が二人共アレなんで端から見れば強盗と魔女なんだけど……。

リ：『勇くん、明日も学校休んじゃう！？』

「明日は行くぞ！勝手に学校に電話したりすんなよ！？」

リ：『へいへい！あつ、勇くん明日はその恰好で学校行きなよ』

いや、それだけは死んでも無理だろ……………。

第29話：心の闇と可愛いヒロ（前書き）

今回はダークな雰囲気の話です！！

リーナのイメ

ージが変わる可能性がありますのでご注意ください……。

第29話：心の闇と可愛いヒロ

日曜日の朝ってなんだか目覚めがいいよね。

でも今の私はそんな事を思う気にすらならない。

私は夢を見た……。

とっても楽しい夢……。途中までは……。

どんな夢か忘れちゃったけど例えるなら、空にふわふわ浮いている自分がいきなり、一筋の光も届かない真っ暗闇の深海に突き落とされる……。そんな夢。

夢ってなんだか好きになれない。

楽しい夢はすぐに終わって嫌な夢はずっと続くから……。

嫌な夢は必ず私の過去を思い出させようとする。

私は自分の過去が大嫌いなのだ……。

わがままでどうしようもなかった私、みんなはそんな私をどう思ったかなんて知らない。

(……………)

“知らない”は間違いかな？本当は知っていた。

でも気付かないフリをしていたんだ……。

私は少しずつ孤独になって行っただよね……。

でもね？そんな私といっつも遊んでくれる男の子がいたの……。

名前も顔も覚えてないけどすごく優しく、でもちよつと怒りっぽ

くて、素直に笑い合える、そんな人だった……。

でも幸せって長くは続かない物……。

幸せって一度失うとなかなか取り戻せない物……。

時計の電池が無くなったから別の電池を入れればいい、なんて簡単な物じゃない。

大袈裟な例えかも知れなけど今までの幸せを取り戻すには、広大な

砂漠に落ちた小さな米粒を探す。くらい大変なのだ…………。

その男の子ともいつしか会えなくなった……。

理由は私が魔女になるために魔導学校へ行ったから。私はそれを彼に伝えた。

そしたら、彼はなんて言ったと思う？

(…………)

彼はね、何も言わなかった。

ただ黙って俯いてた。

涙が地面で濡れてるのがわかった…………。

私のために泣いてくれる人がいるなんて思っても見なかった…………。

それを見て、私も初めて泣いたんだよ？

それまでにだって泣いた事はいくらでもあった。

でもそれは怒られて泣いた、とかただの嘘泣き、みたいなレベル…………。

…………。

本当に人との別れが辛くて、悲しくて泣いたのはあの時が初めてだった。

それでね、その子が私に小さな指輪をくれたの。

学校の図工の時間に作ったような小さくて、不格好で、でもすごく温かみのある指輪だった…………。

それでね、その子は言ったっけ…………。

『この指輪はね、幸せの指輪なんだよ。だから人に見られちゃ駄目だよ？ 幸せは人に見せちゃ駄目なんだから…………。』

幸せの指輪…………か。

この指輪があればまたあなたに会えるのかな？

またあなたと楽しいお話ができるのかな？

いや、そんなはず無いじゃないか。
一度失った幸せは取り戻せ無い……。
もしも、《砂漠にある一粒の米を拾って来たらお前を幸せにしてやる。》って神様に言われたらあなたはどうする？
何年も何年もかけて米粒を探す？

(……………)

誰もそんな事しない……。そんな下らない事に誰も時間を費やすはずないから……………。
でも、私ならするだろう。私は知っているから……………。幸せを手にする難しさと、幸せを失う怖さを……………。
だから私は今だってこの幸せの指輪を肌身離さず持っている。
このビーズの指輪が本当に幸せを運んでくるなんて思ってたない……………。
……………。
でも……………。希望くらい持つてもいいよね？
私が初めて好きになった人、この指輪をくれた私の大切な人は実はすぐ近くにいて……………。

(……………)

あはは……………何考えてんの私？いい加減、都合のいい妄想は止めなよ。
自分で言っただんでしょ？

《幸せは取り戻せない》って……………。

(……………)

はは……………もう一人の私は冷静だね……………。
なんでかな？なんで私泣いてるの？

今の私ってさ、幸せじゃないのかな？

この前だって勇くん和游戏センターで暴れたりしてさ、とっても楽しかったのに……………。

幸せって……………何なの？

隣の部屋で目覚まし時計のベルが鳴っている。

そろそろ勇くん起きるかな？

だったら早く涙を拭かないと……………。

勇くんが心配しちゃうから……………。

今日は自分はとても幸せなんだと思って生活しよう。そうだ。私は今だって十分幸せじゃないか……………。

自分にそう言い聞かせる私は端から見れば実に滑稽だろう……………。

でも私はそれでいい。

私は道化になれば幸せを実感出来るはずなんだから……………。

(……………)

さあ、楽しい一日の幕開けだよ、今日はどんな幸せに出会えるかな♪

私と言うピエロはいつもどおりに部屋を出て行った。

第30話：不思議な夢（前書き）

今回は前回とリアルタイムで読んで下さい！

第30話：不思議な夢

まだ目覚ましが鳴ってないのに起きちゃった。

日曜はいつも目覚ましが鳴ると即止めて二度寝するはずなんだが……。

何故こんなに早くに目が覚めたのかわかってる。

(……………)

夢を見たからだ……………。

俺がたまに見る不思議な夢だった……………。

どんな夢かって？

じゃあ話すしよう。

その夢の中での登場人物は必ず二人。例外は無し。

その夢が始まる場所はどこかの公園。これも例外は無しだ。

登場人物の一人は幼き日の俺。もう一人は小さな女の子……………。

その女の子はかなりわがままだけど、どこか頼りなくて恨めない、そんな感じの子だった。

俺はその子と遊んでいる。よくやった遊びは砂山作りだ。

俺達は二人で自分の背丈くらいある砂山を作っては穴を掘ったり、蹴りでぶち壊したりして楽しんでた。そんな楽しい時間が永遠に続くと思っていた俺はまだまだ甘かったと思う。

彼女は一通り遊ぶと俺にある事を伝えた。

『私ね、今度から魔法使いの学校に行くの……………。だからもう……………。』

もうすぐ真っ暗闇が支配される空を太陽が照らす。
それは金色に輝き、とても美しい……。
それを背に立つ彼女はとても神々しくて美しかった……。
肌を引き裂くような突風が彼女の着ている真っ白なワンピースを揺らす……。

『……ありがとう……。また会えたら一緒に遊ぼうね……。』

彼女が途中何を言っているのか聞いていなかった。
いや、聞かないフリをしていた。

でも幼き日の俺の頭は今ほど利口では無いらしく、聞こえないフリをしていたはずの言葉が頭の中で残響していた。

『また会えたら……。』

これはどんな意味を指す？わからない、わかってるけど理解なんてしたくない……。俺は俯き泣いた。

彼女もつられて泣いた。

『また会えたら……。』

その言葉の意味を理解してしまったから……。
いったいどれほど泣いたんだろう……。

とても長い時間だったはずなのにまだ空は金色に輝き、俺達が沈黙していた時間が微々たるものだと教えてくれた……。
俺はポケットの中に隠していた小さな指輪を握っていた……。

これは俺が初めて自分の意思で作った物。

彼女にあげる友情の証、幸せのお守り。

全く同じ指輪を作って彼女にあげたかった。

何故かはわからない。

いいや、わかっていたさ。俺は彼女が時折見せる悲しげな表情に気付いていたから……。だから幸せになって欲しかった。だから作った。だから渡した。彼女は不細工で小さなビーズの指輪を見て小さく泣いた……。そして

『ありがとう……。』

と搾り出すような声で言った。

今あの少女はどうしているだろう……。立派な魔法使いになれただろうか……。俺は何度もその女の子の事を同じ魔法使いであるリーナに聞こうかと思った。

だが肝心な名前を覚えていない……。それに魔法使いの学校が一つとは限らない。たくさんあるなら何処に行ったのかすらわからない。ジリリリリリリリ！

止め忘れた目覚ましが鳴る。そろそろリーナを起こすかな。

俺は着替えを済ませ部屋を出た……。

第31話：ハバネロ戦争勃発！？

私が部屋を出ると勇くんも部屋を出て来た。
まず目に止まるのが勇くんの爆発頭…………。

頭に時限爆弾でも仕掛けてたの？みたいな乱れ方！

私は思わず大爆笑！

勇くんは怪訝な顔をしながら一言。

勇：『お前が自分で起きるなんて珍しいな……………ミサイルかなんかが降ってきそうで怖い……………。』

ミサイル！？雨とか雪じゃなくてミサイル！？

私が自分で起きる〃戦争みたいな感じになってない！？

か弱いレディーに向かって何たる暴言！！

この輩には制裁を与えなければ！！

(……………)

朝っぱらから勇くんのテンションを最大まで上げるにはどうすればいい？

(……………)

《あれやつちまえよ！絶対やばいけどな！》

私の中の悪魔が囁く…………。

(……………)

しかし あれ をやるには私自身も命を賭ける必要があるかも知れ

ない……。

(……………)

いいや、自分の命が危険になろうと勇くんを泣かせなければなら
ない！！

やるんだリーナ、殺るんだリーナ……………。

よしッ！殺ってやる！！

「今日は私が朝ごはん作ってあげるよ」

勇：『マジ！？じゃあ任せるわ』

ふふふ……………流石は勇くん。口ではあんな事言いながら警戒心丸出
しの目だ。でもね？そこが勇くんの甘いところ……………。

私は絶対失敗しない方法を知ってるから。

この作戦には洋食がいいから今日はトーストを焼いて、あとスクラ
ンブルエッグとかサラダとか……………。

とにかく和食より何倍も楽でいい！

和食は、味噌作って魚焼いてお米炊いて……………って朝っぱらからハー
ドすぎ！

日本のお母さんは偉いよ！みんなもちゃんと母の日くらい優しくし
てあげてよ！？

(……………)

何言っただ私……………ていうか誰に言ってたの！？

(……………)

まあいいや♪トーストがこんがり焼けてとっても美味しそう♪
じゃあそろそろ仕上げに取り掛かるっ！
確かあそこの棚に……………あつた。

秘密兵器【タバスコ】

が……………。

とっても美味しそうなトーストに私はタバスコをぶちまける。

綺麗な朱に染まるトーストが怖い……………。

我ながらとても恐ろしい事をしてしまった……………。

こんなに真っ赤だと流石にばれる。

それだけは阻止しなければならぬ！！

だが時すでに遅し。

もうどうにでもなれ！！

私は最期の仕上げをしてテーブルへ。

勇：『いや、このトーストやばいって。お前のと換えて。』

「やばくないって！文句は食べてから言っ……………！」

スパアアアアン

私のお皿にあったトーストが消える！！

勇くんは勝ち誇った顔で私を見る。

(……………)

うわぁ、このトーストやばいって、風邪でも引いた？みたいな感じで真っ赤だもん……。私は風邪気味トーストと睨めっこ……………。

勇：『どうしたんだリーナ？早く食べればあ？それとも食べれない理由でもあんのか？』

勇くんは私から奪った平熱トーストをかじる……………。

(……………)

フツ……………勝った。

勇くんの顔が少しずつ赤くなる……………。
そりゃそうさ！！

私は最期の仕上げに自分のトーストにもある物を仕掛けたからね！！
それは

大量破壊兵器【ハバネロソース】

辛さはタバスコなんかの比じゃない！

だから少量でも威力は絶大！！

トーストを風邪気味にする事なく相手を潰せる頼れる相棒！！

自滅覚悟の作戦は成功した……………今のところ。

気付いた時には手遅れだった。

勇くんは私の口にハバネロトーストをぶち込み、私の口を塞ぐ！！
やばい！少しずつ辛さが……………！！！！

私の口の中は激戦区。

たくさんハバネロ兵が戦っていて、思い思いの武器で私の口を破壊する。

勇くんは涙を流しながら大爆笑。

私は涙を流しながら悶絶……………。

私はハバネロ兵にさんざんぶちのめされた。

だが勇くんに一矢報いる事ができた。

そのお陰で私達は朝っぱらからハイテンション!!

でも勇くんはいきなり冷たい笑顔でこう言った。

勇：『今日はリーナのお陰で朝から気分がいいぜ。恩返ししないと
な』

うーん、これってやばくない？

今度、本屋さんで【夜逃げマニュアル】でも買おうかな♪

第32話：鉄さんに乾杯

はあはあ、口の中がまだ痛い…………。

明らかにハバネロ戦争で被ったダメージは私の方が上だ。

あれからすでに2時間も経ったのにまだダメージがあるとは…………

ハバネロ、恐るべし！！

今度はフランとレオンにも食べさせよう。あと生意気なテリアスにもね♪

(…………)

勇くんは居間で謎のDVDに見入っている。

多分映画だと思うけど一見しただけではどんなストーリーなのかすら不明。

さらにジャンルまで不明だからある意味すごい。

私はケースを広い上げ、タイトルを見る。

【男達のトマト】

何この映画？題名からして意味不明だから…………。

勇くんも勇くんて号泣しながら見てるから信じられない…………。

勇：『鉄さんのトマトが！クソッ…………うう…………。』

いやいやいやいや、マジで意味わかんないから！

(…………)

この映画ゆるすぎ！

私的には第二次大戦中の日本最大の戦艦の壮絶な最期の話にした方

が絶対売れるし泣けると思う！！

勇：『ダメだ鉄さん！行っちゃダメだ！止めてくれ鉄さん！！鉄さ
ああああん……………うう、鉄さんのバカヤロー……………』

(……………)

そこでなんで泣けるの！？私は雑誌見ながらだから音声だけしかわ
からなかったけど問題のシーンの内容は確か鉄さんが農業を辞めて
都会に出ると仲間に告げる感じ。

別に鉄さん死んでないし、それどころか人生の新たな一步を踏み出
そうとしてる。

私ならそんな人は応援して送り出してあげるけどなあ……………。

なんか勇くん可愛い♪

だって床に寝転がってジタバタしながら泣いてるもん♪

そんな赤ちゃん勇くんはいきなり起き上がり一言。

勇：『わかったよ鉄さん、俺はあんたの仲間だ、だから俺はあんた
の意志を継ぐ！立派はトマトを作ってやるからな！！』

(……………)

感化されすぎ。

ふざけて言ってるのかと思ったけど顔は大マジ……………。エンディ
ングを見終わった勇くんは私に振り返りながら言った。

勇：『リーナ！今からトマトの種買いに行くぞ！早く準備してくれ
！！』

ええ！？本気なの！？
私は絶対イヤ！！

「トマトなんて作らなくても買えばいいでしょ？だいたい……………」

勇：『バツカヤロー！！お前はトマト作りの苦勞を知らないからそんな事言えるんだ！お前もこの映画を見る！！そしたらわかる！』
私の前に突き出される謎の映画のDVD……………。
多分見ないと勇くんには八つ裂きにされる……………。
テレビの前に座る私の横には正座姿の勇くん……………。逃げらんないよ。

(……………)

ああ……………始まった……………。
無駄に勇ましいオープニング。私は笑いそうになったけど横にいる般若の殺気に気付き、沈黙。

(40分後)

「殺虫剤はダメだよ！トマトが痛んじやう！ああああ……………」

やばい！面白いよこの映画！！なんかね、トマト愛と男の友情がすごくい。

鉄：《機械なんか使ったら愛が無くなっちまう……………トマトがかわいそうだ。》

鉄さん、あんた偉いよ。
さすがトマト一筋43年だけあるよ。

横の勇くんなんてさつきから

『鉄さん、あんたは偉人だ。尊敬するぜ。』

ばっかり言ってる。

ちくしょう、泣けるよ……私の……完敗だ。

鉄さんは仲間の説得で上京を止めた。

これからも精一杯トマトに愛情を注ぎながら暮らすのだ。

(……………)

「勇くん、鉄さんまたトマト作るんだよ……？さつき鉄さんの意志を継ぐって言ってたけど……………」

私は涙を流しながら言う。

勇：『馬鹿野郎、鉄さんは病気だったろ……………だからもう先が長くないんだ。でも鉄さんは人がいいからみんなに心配かけたくなくて……………くつ。』

何だって！？そうだったのか！

何故そんな重大な事に気付かなかったんだ私は！？

「勇くん、早く準備して！トマトの種買いに行くよ！？」

立ち上がる勇くんの瞳には真っ赤な炎が宿る。
多分、私の瞳にも炎が宿っている……。

勇：『鉄さん、後は俺達に任せてくれ……。』
□

私達は互いに頷き合い玄関へと走って行った。

第33話：畑作りと波乱の予感

我が家の庭にも小さい畑ができた。

トマトの種を馬鹿みたいに購入した俺達はまさに有頂天！

大量の種の袋をレジに出された店員の顔の引き攣った笑顔は今でも忘れねえ。

《お前は鉄さんの苦勞を知らないからそんな顔ができるんだよ、バ
ーカ！》

と、俺は心の中で店員を嘲笑ってやったさ。
でも、もう一人の魔女は

『あんた何がおかしいの？私の事舐めてんの？あんた鉄さん侮辱し
てんの？ぶっ殺され……………』

あそこで俺の手刀が決まらなかったらやばかったな…………。
思った事を率直に言うのはいいけど世の中には口に出したらダメな
場合だってある。まあそんな戯れ事彼女に言っても意味ないけどね。

まずは畑作りだな。

規模的には花壇程度なんだけど呼び名は《畑》に満場一致。
満場一致つっても二人しかいないから淋しいよね。

リ：『レンガはどこだああああ！！』

リーナはレンガを探しながら絶叫している。

(……………)

目の前にある大量のレンガに気付く余地すらないらしいな……………。

「レンガお前の目の前にあるじゃん……………」

リ：『あつ……………、東大もと暗し、だね』

《東大》じゃなくて《灯台》な！？

リ：『見つけたよおレンガちゃん』積み上げてやるからなあ』

レンガを大量に持って立ち上がるリーナ。

だがレンガの重さで動けないらしく、足をプルプルさせながら立ち尽くしている。

俺はリーナからレンガを半分受け取る。

けっこういう感じなんじゃないの？

レンガもくつついたし、土も入れたし、耕したし！

あとは種植えるだけ！！

「リーナ！種持ってくるんだ！大至急だ！」

リ：『イエッサー！！』

一定間隔で種を植える俺とリーナ。

無言で土に穴を開け、種を植える姿なんてご近所に見られたら自殺

もんだ。まあそんな事気にしないのが俺達のいいところなんだけど！

しかし疲れたなあ……。

レンガの積み上げから種植えまでが終わるまで三時間くらい掛かった。

俺達は滝のように汗を流しながら庭にへたりこむ。

しかし冷静になると映画に感化されてここまでするとは我ながら馬鹿だ。

リーナもそれに気付कि、笑っている。

俺も呆れて笑うしかない。

リ：『はっ！そうだ、今日は決戦じゃないか！勇くん、早くアレやるよ！！』

あー、確かそんなのあったねえ！。

なんか今日はこの前買ったゲームで決戦があるらしいなあ……。

なんかすごらしく、一つのエリアですんげー数のプレイヤー同士が戦うらしい。

リ：『早く早く早く早く早く……』

たかがゲームでそんなに焦るな……。

しかもこんな汗だくでゲームなんてできねえ。

「まず風呂入れ……。」

リ：『わかった！ソッコーでシャワー浴びるから勇くんも早くしてね！？』

「へいへい……。」「

ああ、波乱の予感がする。

第34話：ピストル最強説

遅いよ!!

いつまで風呂入ってんのよあの男は!?

早くエントリーしないと決戦に参加できなくなるのに!

勇：『あゝ、いい湯だった。』

つたくめでたい男だ。

「勇くん、早くエントリーしてよ!いつまでもそんな悠長にしてたらぶつ飛ばすよ!？」

勇：『はいはい。』

すでにエントリーした私にあの時の仲間がチャットで話しかけてくる。

《今日は絶対勝ちましょう!》

だって、

よりによって仲間が

【最後の最後で本拠地守れなくて人を負けにするふがなくて頼り無い奴ら】

だから不安だ……。

今日は私と勇くんの最強コンビで敵を打ち砕く予定。

勇：『ログインしたぞ!』

勇くんがログインしたからまた挨拶する頼り無い仲間。

実際この人達はかなり強いらしく尊敬する人までいるらしい……。

まあ、この人達は大事なところで折れちゃったから私達二人は尊敬どころか足手まといたと思ってたりする。

この決戦のルールはとにかく盛り上がりそうな感じで一つのチームは必ず5人編成。

チームには最初に25ポイントが与えられる。

一人死ぬと持ち点から1ポイント無くなって先にポイントが全て無くなったチームの負け、というよくありそうなルール。

一人がたくさん死ぬと他の人が死ねなくなる。

説明はこれで終わり。

私達の激戦が今、始まる！

《闐然の密林》

なかなか不気味なエリアだね……。

《闐然の密林》はかなり地形が複雑でさらに視界も悪いから乱闘になる事が多い。

ちなみに《闐然》は《げきぜん》って読んで、ひっそりしているの意。

メンバーはスタート地点がばらばらだから合流するのが普通。

でもこのエリアは一人で歩く方が実は安全。ここは精密射撃がしにくいから攻撃は乱射が主。

集団で歩くと流れ弾に当たる確率が一気に上がる。

そんないつもと違うエリアを慎重に進んでいると私の目の前にはスナイパーライフルが落ちている。

(……………)

このエリアで狙撃はまず不可能……………。

でも餌に使えるかも♪

初期武器のピストルだけしか持ってたなかったら誰だって他の武器を拾いたがる。使えないとわかっていてもとりあえず拾っておきたくなるのが人情。

ガサツ……………

ほおら、餌に釣られて敵が来た♪

私は木の陰からそいつに鉛玉をぶち込む！

一瞬、相手も反応したけどもう遅い。

ピストルの弾でも多段ヒットすれば生きてられるはずもない！

《プレイヤー4が倒れました。》

プレイヤー4はこれで少しは成長するかな？

《ナイスですリーナさん》

仲間からの称賛が心地いい。

さあて次はどいつを狩るかな♪

(……………)

決まってるじゃん、私の標的はプレイヤー4だけ♪

私はマシンガン捨てて餌にする。

このエリアでマシンガンは最強と言ってもいい。
だから誰だって拾いたいはず。

まさかこれが餌だとはわからないだろうね♪

ガサツ……ガサツ。

ははは、今度は一人じゃないよ♪

慎重なのはいいけど、二人だからって安全じゃないんだよ？
案の定現れたのは敵さんで甘美な餌を拾うために来たらしい。

ポイツ……ボオオオン！

《プレイヤー3が倒れました。プレイヤー4が倒れました。》

あははは、甘いんじゃないの？強力な武器なんて所詮は餌。使うよりも餌にした方が確実に相手を葬れる。どんな状況でも使える手榴弾とピストルがあればあとはいらない。

まあそれはこのエリアでの話なんだけどね♪

(……………)

ちい、私と勇くん以外の仲間がけっこう死んでる。全く役にたたない奴らだなあ。ダダダダッ！バキッ！

近くで戦闘があつてる？

威嚇にしては撃ちすぎだし、このエリアで威嚇なんてしない。
よしっ！援護に行くかな♪

あー、かなり激戦だ。

相手は敵のエースでかなり強いらしい。

私のチームの雑魚二人じゃ撃退できるはずも無く私が到着する前に撃沈……。

敵さんも私に気付いたらしくマシンガンを撃ってくる。

私はピストルだけしか持ってないけど、まあこんな奴楽勝レベル♪

私は木に隠れながら移動。相手はかなり正確に射撃してくる。でもそんなに撃ちまくると弾切れする。

ダララララ、カシッ……。

はい、弾切れ♪

私はリロード中の敵さんの頭に一発！

《プレイヤー1が倒れました。》

どんなに勇猛な武将でも天才策士には勝てない♪

隠れてばかりじゃつまないね！

そろそろハントに行こうかな……………。

でもあと少しで私達の勝ちになっちゃうなあ。

勝てばさらに戦況は悪くなる。

この初戦は2チームだけしか戦わないけど次の戦闘は4チームに倍加する。

決勝は生き残った6チームで勝負！

まさに策士の出番だからテンション上がる！！

でもどんな作戦があっても最後に問われのはプレイヤーの腕。

《戦場制圧しました。》

あらら、勝っちゃった♪

多分とどめを刺したのは勇くんだね♪だって横でガッツポーズしてるから。

勇：『危なかったなあ……。あいつら死にすぎじゃねえか！？俺達だけの方が絶対強い……。』

「だってあいつら、いきなり《合流しましょう！》だもんね。何もわかってないよね……。』

私達は自分達が勝利に貢献できたと勘違いしている下手くそ共のチャットに呆れている。

次の勝負は一週間後……。この下手くそ共が仲間なのは頼りないなあ、なんて思いながらもワクワクしちゃう♪

時計を見るとすでに午後6時。

勇：『そろそろ飯作るから準備しろ』。

「はい♪」

第35話：ダイエット計画進行中！！

『キヤアアアア！！』

相変わらずうるさい奴だなあ……。

どうせまた体重計に乗って針が指した数値に絶叫してるんだろう……。

リ：『もう駄目だ……。勇くん、私を殺して。』

はあ、これもいつもの発言だ。体重なんて別にどうでもよくない？

「別に少し体重増えたくらいでギャーギャー言うな！馬鹿かお前は！？」

今日は強めに言ってみる。

リ：『うわああああん！勇くんの馬鹿ああ！勇くんなんて死んじやえー！！』

うわー、死んじやえって言われた……。これって以外にショックだ。

「じゃあダイエットでもしたらどうですかお嬢さん。」

リ：『するー！！』

即答しやがった。こいつが一人でダイエットするなんてありえない絶対巻き込まれてしまう。ああ、俺はなんて失言を言ってしまったんだ……。

「どんな事するんだ？君、ダイエットの知識はあるのかな？」

リ：『無い！！』

また即答。知識ないならできねーじゃん。

リ：『でも大丈夫！私ね、ダイエットの達人を知ってるんだよ』今から呼ぶから待ってて！』

今から呼ぶ？ああ、達人の正体わかった……。あいつがダイエットの達人？嘘だね。

あいつにダイエットを頼む？はは、死人が出るぞ？

『勝手に呼ぶなっつただろ！僕は今忙しかったんだからな！！』

来たよ、緑の悪魔テリアスが……。

リ：『テリアスう、ダイエットの仕方教えて』何でもするから』

テ：『ダイエット？そんなの簡単じゃん！そこら辺歩いてる！！それでダイエット成立だ！じゃあな……』

リ：『そんな時間の掛かる方法じゃ駄目なんだよ……。手っ取り早く痩せたいの！！』

テリアスは動きを止めて振り返る。

テ：『どうしても言うなら教えてやる。条件は今日から金輪際、僕を召喚しない事。もし召喚してしまった場合は僕を《様》付けで呼ぶ事。これができるなら教えてやるよ。』

金輪際ってさあ、召喚獣の意味無いじゃん……。
そーとーやる気無いなあこの緑粘土は。

リ：『わかったから早く教えて下さい、師範！！』

テ：『じゃあこの契約書にサインしな！それが終わったら教えてやるよ。』

一体どこにそんな物持ってたんだ？用意周到な奴だ。それに何の躊躇も無くサインをするリーナもどうかと思う。

テ：『じゃあテリアス様のダイエット講座を開始する。さっさと座ればんくら共が！！』

テ：『まず極悪コースと地獄コース、どっちがいいか選べ。』

どっちも最低のコースだ。でも彼女は躊躇なんてしない。

リ：『最高難易度の修羅コースでお願いします!!』
なにそれ？お前一人でやれよ？俺を巻き込まないでくれよ？まだ死にたくないんだから…………。

テ：『おいおい、死んでも知らねーぞ？いいのか？』

リ：『大丈夫だよ！二人なら頑張れるもん♪』

(…………)

二人？ああ、テリアスと二人でやるんだ…………。テリアスも熱心でいいねえ。

さあて、俺は自分の部屋に戻るかな。

リ：『勇くんどこ行くの？早くダイエットするよ♪』

なんて綺麗な目をして俺を見るんだこいつは…………。普通なら胸がときめくかもな。

でもそんな余裕は無いんだよ、今の俺にはな…………。

だって死ぬかも知れないんだから…………。ダイエットで…………。

リ：『早くしーてーよー』

「はあ、やればいいんだろ？やってやるよ！でも俺が死んだら責任取れよ!？」

リ：『りょーかい♪』

そこは否定してほしかったな。俺は黙って椅子に座る。

テ：『じゃあまず、脂肪を簡単に燃焼する方法を教える。多少痛い
が我慢すれば一発で激痩せた。』

リ：『その方法とは何ですか!？』

テ：『なあに、簡単な事だ。まず腹にダイナマイトを巻き付ける。
んで着火！5秒後には激痩せしてるぞ。』

いや、痛いとか痩せるとかの次元じゃ無いだろ！気付いた時には天
国にお引越ししてるだろ！

リ：『そんな事したら死んじゃいます！真面目にお願いします！！』

テ：『じゃあもつと簡単な方法を教えてやるよ。休みの日に一日中
街の中を全力で走れ！休憩、給水はもちろん無しだからな！！』

(……………)

いや、それも死ぬだろ。

リ：『いい加減にして下さい緑粘土さん！それも絶対死にます！！』

テ：『根性無いなあお前。じゃあもうフランと喧嘩でもしてろ！死
人は出るけど確実に痩せられるから。』

それが一番危ないだろ。

つーか俺に顔向けながら死人って言うな！

リ：『それはアリだね』

おーい、そんな恐ろしいダイエットにあっさり賛成しないでくれる？

テ：『じゃあ頑張るんだぞ！僕は帰るから。』

テリアスは魔法陣に飛び込む。

テリアスの言葉は絶対俺に向けられていた……………。

リ：『勇くん、早くフラン呼ぼうよ♪ダイエット成功するかなあ♪』

ははは……………ダイエットが成功した時には俺はこの世にいないんだろ
うなあ……………。

(……………)

よしっ、フランが来る前に遺書作成だ！！

第36話：水の守護神・リヴァイアサン

この人だれ？

フランと一緒に来たこの西洋美人は誰だ！？

真っ白なドレスに深い蒼が映える傘を持ってて、いかにもお姫様みたいなの人は誰だ！？

リーナも驚いている。

リ：『何でリヴァさんがいるの！？呼んでないよ！？私はフランをぶっ潰したかったからフランしか呼ばなかったのに……。』

リヴ：『うふふ、久しぶりねリーナちゃん。今日はお仕事が早く終わったからフランちゃんとお茶会をしたのよ。その時……。』

どうやらこの西洋美人は向こうの世界での権力者の一人、リヴァイアサンらしい。

見た目はおっとりしてるけど守護神の一角だからかなりの実力者なんだろう。

リヴァさんは俺に気付いたらしく

リヴ：『はじめまして、稲葉さん。昇格試験でのご活躍は聞いておりますわ。』

うわー、この人礼儀正しい！あの狛犬守護神とはえらい違いだ！！だってあいつは挨拶なんてしなかったからな！！

リ：『勇くん、なに見とれてんの！？私という素敵な嫁がいながら……。』

いつからお前は俺の嫁になった？

リヴ：『あらあら、もうそんな関係だったの？じゃあ式は私の宮殿で挙げて下さいね。』

いやいやいやいや、何言ってるのこの人？この人天然なんじゃないか？

フ：『リヴさん、はやと

ちりは駄目ですよ』

さすがフラン！わかってる！

リ：『フランはなんにもわかってない！私達の愛の深さを！』

わかってないのはお前だ！

フ：『なんですって！？あんたは馬鹿すぎるからすぐに勘違いするんですよ！』

ああ、始まった。

こいつらしい加減に成長してくれ。

リヴアさんはその光景を見て微笑んでいる。

飛び交う魔法を見慣れた自分が今では恐ろしい。フランの放った魔法が俺に飛んで来るのも慣れた。それが直撃して気絶するのにも慣れた。

今日もそうなるだろう。

だってフランの魔法が俺に迫ってるから……………。

パシャ……………。

なんだ今の音は？まるで水が跳ねるような静かな音。ふと気付くと俺の目の前に水のカーテンみたいな物がある。

その中でフランの放った魔法がぐるぐると渦巻き、消えた……………。

リヴ：『大丈夫ですか？』

どうやらリヴァさんが魔法で俺を守ってくれたようだ。

さすがは守護神！

あんな強力な魔法を指一つ動かさずに発動できるとは恐れ入ったぜ！！

リヴ：『ふふふ、あの子達も相変わらずですね。』

「ははは、かなり苦勞してますよ。」

俺達は穏やかな会話で和む。

穏やかじゃない会話もすぐ近くから飛んで来るけど気にしない………。

リヴ：『うふふ、でも今日は元気なリーナちゃんに会えてよかったです。』

「はあ、あいつはいつもあんな感じですよ？」

リヴ：『そうですか……。稲葉さんとの出会いがリーナを変えてくれたんですね。』

「どういう意味ですか？」

リヴ：『今は言えません。リーナの了解がない事には。』

「はあ……………」

リヴ：『でも心配しないで下さいね？今のリーナには稲葉さんの存在が欠かせないですよ。リーナは本当に稲葉さんの事が……。』
そこまで言つとリヴァさんはまた二人を見ながら魔法を弾いていく。

リ：『はあはあ……やるわねフロン！』

フ：『はあはあ……フロンじゃないわよ馬鹿！』

いつしか勝負は魔法から口へと移っていた。

今回は家具、家電の被害は無い。

リヴァさんが全て防いでくれたからだ！

さすが守護神！つってもどこかの狛犬守護神だったら一緒に参加して家ごとぶっ飛ばしてるだろうけど。

リヴ：『それでは失礼しますわ。またねリーナちゃん。』

リ：『またね〜！』

フ：『じゃあ私もそろそろ失礼しますね。』

リ：『またダイエットしようねフロン♪』

リヴァさんとフランは今日の出来事を楽しんだらしく笑いながら帰った。

今日はリーナが夕飯を作るらしいので俺は黙ってテレビを見る。

リ：『勇くん、今日の夕飯は闇鍋でいいでしょ？』

(……………)

闇鍋？どうせまた訳のわからん物入れるんだろ？いい根性してんじやねーか！

逆に泣かせてやるぜ！

「泣いても知らねーぞ？それでもいいなら勝手にしな！」

リ：『あはは、勇くん、《死んでも知らない》の間違いでしょ？』

(……………)

なに入れる気だあいつは！？
死ぬのか？俺は鍋で死ぬのか？

パチン……。

電気が消えた……………。

リ：『じゃあ、そろそろ始めよつか』

テーブルに鍋が置かれる。

(……………)

さっきまでリヴァさんの言葉の意味を考えていた俺はすでにいない！

今はこの命を賭けた闇鍋に勝つ事だけに集中しなくては！！

俺は不敵な笑みを浮かべているであろうリーナと向き合い、箸を掴んだ！！

第37話：発狂闇鍋

グツグツグツ……ポンッ！

なに今の音？なんか小爆発が起こったぞ？
なにが入ってんだよ、この鍋……。

リ：『勇くんお先にどうぞ。』

「いやいや、ここはレディーファーストですよ。リーナさんからどうぞ。」

(……………)

(……………)

リーナは何が入っているのか知っている。
そのリーナが鍋を突く事を躊躇している。かなりやばい物がたくさん入っているんだろう……。

リ：『じゃ、じゃあさ！一斉に食べようよ！どっちが逝っても文句無し！どう！？』

「なるほど、よしっ、それでいいぞ！」

リ：『じゃあ逝くよ！せーのー！』

俺達はおもむろに箸を鍋に突っ込む！
そして、適当に掴んだ物体を口に放り込む。

(……………)

なんだこの物体は！？なんかどろどろしてんぞ！？しかもほのかに甘い。

その甘さにいろいろな味がマッチングしてクソまずい！！

$$\left(\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right)$$

わかった！これはマシュマロだ！！

鍋にマシュマロとは……。何たるミスマッチ！！

溶けてスライム状になったマシュマロはまさに異物！目に見えていたらどんなに空腹でも食欲なんて一発で消え失せる！

リ：「ケホッ、コホッ……うう……。」

何を食ったんだあいつは？ 噎せる程の何かを食ったんだから俺より被害はでかいはず。

「何食べたんだ？」

り：「ジャムパン……ほのかに苺味だった。」

$$\left(\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right)$$

ジャムパン？それはやばいな！

濡れてグシャグシャになったパンなんて想像しただけで鳥肌が立つ。それを食べるなんて普通の神経では不可能。

り：「あははははは！勇くん、次逝くよ！あーはははははは

！」
『』

まだ一品目にして発狂しちゃったか……………。
かわいそうに。

リーナは早く次の物体を食べたいらしくキヤーキヤー言っている。
思考回路が完全に崩壊したらいいな。

俺は黙って鍋に箸をダイブさせる。

何かを掴んだ！

感触敵には以外とまとも。多分野菜だと思う。

でも異様にでかい…………。

多分そのまま鍋に入れたんだな。

まあでかくても野菜だから大丈夫♪

俺は野菜を口に入れる。

いろいろな味がブレンドされてはいるが微かな苦味からこれがピーマンだとわかる。

(……………)

なんだ？ピーマンの中からなんか出て来た…………。

ちよつと酸味があるこの謎の物体…………。

正体はヨーグルトか？

(……………)

うん、これはうまい！

ピーマンのほろ苦さとヨーグルトの酸味が絶妙に合わさってそれぞれ
の長所を引き出している！

さらにいろいろな味が合わさり口の中はオーケストラ状態！！

こんな素晴らしい…………

(……………)

危ない危ない。

自我が崩壊しかけていた。言い直すとあれだ、ピーマンのほろ苦さとヨーグルトの酸味が噛み合わずそれぞれの長所をぶっ潰したあげく、例えがたい悪魔の味を引き出している。

あえて例えるなら下水道。

リ：『私も今日からお星様の仲間入り』

リーナは訳のわからん歌を歌いながらキヤーキヤー騒いでいる……。

何を食ったのかなんて聞けない……………。

リ：『ねえフランも食べようよ』私が食べさせてあげる♪お口開けて、ふふふふふ♪

(……………)

とうとう幻覚が見え始めたか…………。

やばいぞ、これは！？

人間の神経を簡単に破壊する料理がここにある。

絶対まともな物なんて入ってない。

完全に壊れたリーナは鍋の異物を次々に口へ運び、そして…………

パタッ。

静かに息を引き取る…………。

俺はリーナをソファに寝かせ、鍋を片付ける。

鍋の中は支離滅裂で魚の頭からよくわからない果物、お菓子など、とにかくバラエティー豊かで見る者を震え上がらせる地獄絵図だった……。

リーナはうなされながらソファの上で暴れている。

リ：『キヤアアアアア！溶けたパンが迫って来るよ！！誰か、誰か助けてええええ！！』

夢の中にまで現れやがったかジャムパン……。
さぞかし無念だっただろうな……。

(……………)

待てよ？リーナの夢にパンが出て来るんだぞ？

じゃあ俺の夢には溶けたマシュマロとかヨーグルトまみれのピーマンが出て来るのか！？

いやいや、そんな事あるはずない。……………多分……。

リ：『危ない勇くん！後ろに溶けたマシュマロが……………すーすー……………』

(……………)

今日は眠れそうにないな。

第38話：ファミリーサイズ

『勇くん早く早く』』

「ちよつとまつてろ!」

はあ、今日俺はこいつと映画を観に行きます。

もちろん今日は平日です。学校はあれです、サボるんです……。

リ：『早くして下さい。聞こえてまーすーかー?』

「うるせーよ!お前こそさっさと着替えろ!その恰好で行く気か!
?もしそうなる俺は行かないからな。』

人を急かしておきながら自分はパジャマっておかしくない?

リ：『じゃあ着替えて来てあげるからちよつと待つてて!』

(5分後)

リ：『着替えたよ!早く行こう』』

またその黒ローブにトンガリ帽子か……。

何で出かける時だけその恰好なんだ?

まあいいか……もう周囲の目なんて気にしなくなったし。

「じゃあ行くか。」

やっぱり平日の映画館ってのはあんまり人がいないな。
リーナが二人分のチケットを購入して走って来る。
そういえばこいつ何の映画観たかったんだ？

リ：『はいっ、勇くんチケット！これね、今世紀最大のヒーロー
が活躍する最高に熱い作品なんだよ♪』
俺はリーナがくれたチケットに目を落とす。

【スパイシーマン3】

(……………)

なにこれ？調味料か？調味料男が主人公か？
おいおい、どんなストーリーだよ……………。

リ：『勇くん、なに怪訝な顔してるの？』

「いやあ、とても面白いそうだなあ、あははは……………」

リ：『でしょ？あつ、映画始まる前にポップコーン買っよう！』

店員：『器のサイズはどれにしますか？』

「じゃあMで……………」

リ：『一番大きいファミリースイズをお願いします！』

店員：『かしこまりました。』

おいおい、どっちのサイズ持つて来る気だ？

どっちのサイズにかしこまったんだ、あんた？おいおい、その手に持つてる愛らしいキャラクターがプリントされたバケツは何だ？どう見ても家族用だよなあそれ……。

俺達二人が二時間ちよいの時間じゃ消費できない量だよなあ？

リ：『勇くん、なにボーっとしてんの！？早くお金払って！！』

俺は黙って金を払う。

(……………)

よしっ、決めた！

もしこいつが全部食べきらなかったら無理矢理にでも口の中にポッ
プコーンをねじ込んでやる！！

それくらいの覚悟は当然あるはずだよな？

リ：『勇くん何でニヤニヤしてんの？早く行くよっ』

映画って始まる前のCMも結構面白い。
特に笑ったのが

《海賊版は許さない。》

ってやつの上に

《海賊王に俺はなる!!》

って言う某海賊アニメの主人公の意思表示だった。

リーナなんてそれを見て大爆笑。

俺も隣で大爆笑…………。

その後も数分間、新作映画の紹介とかがあってそれを見ている二人で論議を交わしたりした…………。

そしてついに本編が始まる。

オープニングもどこと無く格好いい。

どうやら主人公の学生は生きた胡椒に噛まれて特殊な力が使えるらしい。

リーナは目をキラキラさせながら見入っているけど、俺は胡椒に噛まれた主人公の特殊能力が気になってしかたがない…………。

リ：『勇くんもポップコーン食べようよ』

あれこれ主人公の能力を模索していた俺にリーナが笑いながら言う。しかし目は完全に笑ってなくて明らかに助けを求めている。

(…………)

おいおい、もうギブアップか!?

まだ全然余ってるぞ?

リ：『私、映画に集中したいからこれ全部あげるね』はいっどうぞ!』

ふざけんなよ?

俺の中で何かが切れる…。
ガシッ！！

俺はポップコーンをわしづかみにする。もうこれでもかっ！ってくらい掴む！！
そして……………

バアカアアアン

リ：『！！！？』

俺は何も持っていない手でリーナの口を開ける。
そして間髪入れずにポップコーンをねじ込む！
スクリーンでは街の人々が悪役に襲われて逃げまどっている。その音の中にリーナの声にならない悲鳴も合わさっているだろう！
俺はリーナの口を塞ぐ！
じたばたしながら涙を流すリーナ。

「自分がどれだけかい過ちを犯したかわかったか！！」

必死に首を縦に降るリーナ。

さすがに可愛いそうになったので解放してあげる。

リ：『はあ……………はあ、死ぬかと思った……………。』

スクリーンでは主人公が高速で飛行している。
なんか間抜けなシーンで少し笑える。

「これはお前が責任を持って始末しろ……………捨てたりすんなよ？」

リ：『それは無理かも……ちょっとだけでいいから手伝って？』

まあこれを一人で全部食うのは無理だろう。

「ちょっとだけな。」

欠勤ポップコーンは無くならず持ち帰る事になった。映画の内容もこのポップコーンのお陰でどこかへ飛んで行ってしまった。俺が覚えているシーンは主人公が飛行している間抜けなシーンだけ……。

(……………)

何しに来たんだ俺達は！？平日に学校サボってまで観に来た映画。それなのに内容はほとんど覚えてない……………。無駄足すぎじゃねえか？

(……………)

あつ！得た物あった！
それはバケツポップコーン！
……………いらねえ。

リ：『今度は【スパルターマン】観に行こうね♪』

いや、誰それ……。どんなヒーロー？

もうヒーローは勘弁してくれ……………。

今日だって謎の調味料男の能力に振り回された……。しかも俺達にはスパイシーマンの敵より手強い相手が待ち構えている……………。

(……………)

俺はバケツコーン見ながらため息を漏らした。

第39話：策士の鬼ごっこ

「あー、やる気出ねー。」

リ：『まったくだ……あー憂鬱だあー。』

俺達は今、五月病を満喫している。

しかも学校で……。

リ：『授業なんてやってられるか……けっ』

俺は意味も無く天井を見上げ、感傷にふける……。

クラス全体が憂鬱モードでそれに巻き込まれた教師も鬱状態だから微妙に笑える……。

リーナは隣で意味不明な発言を言いながら一人で笑っている……。

キンコンカー……。

チャイムまでうるさい。

しかしやっと授業が終わったから嬉しい。

リ：『勇くん、次は体育だね……はあ。』

そうだった。体育があるんだったか……。

さすがに体育は寝れないな。

しかも体育の教師はクラス担任だし……。

(……………)

嫌な予感がするぜ……。

体操着に着替えた俺達は校庭へ。

担任は鬱状態な俺達を見回して笑っている……。

担任：『今日はお前達を元気にする特別メニューを組んだ！！感謝しろよ！！』

リ：『さすが先生！今日は自習ですか！？』

担任：『鬼ごっこだ！！』
だるッ！！

案の定クラス中から批難の嵐が巻き起こる。
そんな事気にする様子も無く担任は笑いながら

担任：『鬼は5人！チャイムが鳴った時に鬼だった奴は罰ゲームがあるぞ！！』

リ：『そんなの無理でーす♪先生一人でやって下さい。』

担任：『参加しなかった奴は単位やらねーぞ♪』

職権乱用だろそれ！？

リ：『生徒を脅迫しないで下さい。』

担任：『うるせー、俺が法だ！！』

強引すぎだろ。

なんだかんだで始まった鬼ごっこ。

やるからには勝つしかないな。

担任が適当に決めた鬼からとにかく逃げれば勝てるんだ。
案外余裕かもしれない。

ここで大切な事は多人数での行動を避ける事。

一見すると鬼の混乱を誘えそうだがそんな考えは甘い。
絶対裏切られる。

実際それで鬼になった奴もさつき見たし。

ガサツ……………

やばい！

隠れてるのがバレたか？

気配を殺せ、気配を殺すんだ……………。

『あー、勇くんがいる♪』

振り返るとそこにはリーナがいた。

ビビらせんよ。

(……………)

いや、待てよ？もしこいつが鬼だったらやばくない？

リ：『私は鬼じゃないから大丈夫だよ♪』怪しい……………。

自分から鬼じゃない発言は怪しい…………。

リ：『そんなに疑うんなら逃げていいよ』

いや、逃げたくない。

だって走るのめんどくさいし」

「じゃあ信用してやるよ。そのかわり騒ぐなよ？」

リ：『騒ぐはずないじゃん！』

俺達は用具倉庫の裏でごろごろする。

校庭からは賑やかな声が聞こえる。

クラスの奴らも以外に楽しんでるらしい。

リーナはしきりに時計を見ている。べつに隠れてるんだから時間なんてどうでもいいんじゃないか？

リ：『あと少しで私の勝ちだよ』

私達だろ。しかもまだ勝ちかどうかわからない。
この瞬間に鬼が来る可能性だって否定できない。

リ：『あと一分』

リーナは俺の肩に手を置く。それと同時に走ってどっかへ行っちゃった…………。

(…………)

謀られた！奴はこれが狙いだっただんだ！
俺を油断させ終了間際で俺を陥れる！
必死に追い回しより安全で確実な手段じゃないか！
何故今まで気付けなかったんだ俺は！！

キーンコーンカー……………。

授業は終わった。

俺は最後の最後で鬼になった。

リーナはそんな俺を横目で見てほくそ笑んでいる。

(……………)

はあ、俺の中の憂鬱が一気に最高潮まで達した。

リ：『甘いよ勇くん、敵はどこから来るかわからないんだよ？まあ
勇くんの場合すでに来てたんだけど』
憎たらしい奴だ……………。

「覚えてろよリーナ……………」

リ：『ふふふ、再戦ならいつでも受けるよ』

ははは……………絶対泣かしてやるからな。

俺はリーナと不気味に笑いあう。

いつしかホームルームが終わっているらしく各自掃除へ移行……………。

(……………)

ああ、そういえば罰ゲームは5人で職員室の掃除だったな……………。

俺は爆発しそうな憂鬱感を押さえ職員室に向かった。

第40話・く超甘味食作って食わる大会く（前書き）

長期休暇すみませんでした。

第40話：超甘味食作って食わる大会

えー俺は今、インドラと言う狛犬娘が支配する雷の宮殿にいます…。

いきさつは今から説明します……………。

ことの発端は約3時間前…

リ：『今日は休日！何するかなあ〜』

「何もしなくていいから黙って寝てて！」

リ：『せつかくの休日を黙って寝過ごすなんてそいつ
あ馬鹿だぜ！なあ親分！』

親分って誰だよ……………。

『よう！今日も賑やかじゃねーか馬鹿共！』

爽やかに罵声を浴びせながら緑人形のテリアスだ……………。

つーか召喚されて無いのに出て来るなよ……………。

リ：『キヤー！なんであんたが居るの！？召喚してないんだから出てくんないバーカ！！』

テ：『誰に物言っただゴラアア！俺はテメーみたいな《頭の中ポップコーン女》に耳寄り情報持つて来てやったんだよ！』

リ：『頭の中ポップコーンだって！？美味しそうじゃなか！』

テ：『えっと……………やっぱりお前って馬鹿？』

リ：『馬鹿じゃないから！ところで耳寄り情報って何よ？まさかりナ様は美しいから昇格〜みたいな感じ？』

テ：『ははっ勘違いもここまで来ると笑うしかねーな。』

自分の美しさ？が否定されたりーナはテリアスを凝視している。

テリアスも『来るならこいや！』みたいな雰囲気でありーナを見上げている……。このままでは我が家の崩壊は避けられないので俺からテリアスに話しかける。

「おいテリアス、早く耳寄り情報教えてくれよ。」

テ：『おっとそうだった！テメーら今から雷の宮殿にいくぞ！さっさと準備しな！』

ゆ&リ：『はあ〜？意味わかんねーし』却下！』

まさかのリーナと俺のシンクロ見たテリアスはちょっと驚いている。

テ：『あーあ残念だぜえ、インドラのガキが久々に《超甘味食作って食わせろ》大会を実施するらしいんだけどなあ〜』

《超甘味食作って食わせろ》大会？
何だそれ？

リ：『マジで！？やばいよ勇くん！早く準備しないと！』

「おいおい、お菓子くらい家でも作れるだろ？わざわざインドラのところまで行く必要は無い！行きたいなら一人でどうぞ」

テ：『大会は二人一組だからリーナだけじゃ出場できねーよ』

テリアスは『くつくくく』と笑いながら人の不幸を楽しんでいる。

こおんのクソ粘土が……。

リ：『大丈夫だって勇くん』優勝者二名には賞品と称号が貰えるんだよ！』

賞品と……称号？

「賞品はわかるけど称号って何だ？」

リ：『称号は簡単に言つと………称号だよ』

説明になってねーよ……。

テ：『馬鹿に変わって説明してやるよ。称号つーのはあれだ。貰えると向こうの世界で自由にその称号を名乗る事ができるんだ！』

おおー！なんかカッコイぞ！？
早くも乗り気になってるよ俺！？
だって称号を自由に名乗れるなんて素敵じゃん！

「おつしゃ！リーナ、インドラが失神するくらい美味しいお菓子作ってイカす称号ゲットするぞ！」

リ&テ：『けっこう乗り気だったんじゃん……。』
くそっ、恥ずかしいぜ！

そんな眼で俺を見ないでくれ……。

（一時間後）

暗闇から現れたMr・トレインに乗車している。

やっぱりこの素敵列車は乗り心地抜群です。
いつまでも乗っていたい気分だけど目的地まではあとわずか……。

その乗車時間は実に15分弱！
まあワープ機能があるからしかたないんだけど……。

イ：『イエーイ♪今日は僕のために最高に甘いお菓子作ってくれえい！』

宮殿には料理番組みたいなセットが組み立てられている。
参加チームは8チーム。
ちなみに参加者で男は俺だけ……。

うれしいの悲しいのかと問われると断トツで悲しいが称号のために

も頑張るぜ！

イ：『じゃあそろそろ一回戦始めるぞ！』

インドラの号令により俺達はキッチンへ――。

イ：『じゃあ一回戦対《Mr首切り包丁》の対戦開始――！』
スィーツ・ファンタジー

ついに始まったぜ《超甘味食を作って食わせる》大会！

観客・相手ペア共に《Mr首切り包丁》と言う明らかにふざけたチーム名にビビってやがる！

俺はリーナと眼を合わせ言う……………。

「ぜってー優勝すんぞー！」

リ：『おぉー！』

第41話：結果とかじゃない！！

しかしいざお菓子を作るとなると何を作ればいいのか迷う……。

単にお菓子と言ってもその種類はかなり豊富だ……。俺は基本的にお菓子とか作ら無いからケーキとかそんな感じのポピュラーな物しか思いつかない訳だ。

「ここまで来て聞くのも何だけど……何作る？」

リ：『うーん、パスタの麺にガムシロップと練乳でもかけてりゃいいんじゃないかなあ……。意外性とかって大事だからね♪』

(……………)

こいつ、優勝する気なんてさらさらねえだろ……。

確かに意外性は有りすぎだがスイーツ、いや食べ物として成立しない組み合わせだと思っな。

俺がそんな事を考えてる間にスイーツファンタジーの二人は着々と準備を整えている。

このままじゃまずいと思ったのかリーナは

『早くパスタ麺持って来て！』

と言ってる。

マジでやる気だとは……。流石にビビったぜ！

しかし『持って来て』と言われてもお菓子作りの大会にパスタ麺な

んてあるはずも無い！

「リーナ料理長！パスタ麺なんてどこにもありません！..」

リ：『無いなら作る！ボケツとしない！』

なんで貴様はそこまでパスタにこだわる！？

飯にわざわざ苦勞して麵を作ったとして、そして極上の麵ができたとしても、だ。.....勝率は2%以下だ！

「料理長！パスタは場違いもいいとこなんで別のレシピでお願いします！」

リ：『ちつ、じゃあここは無難にケーキでも作るかな.....。』

なんで舌打ち？

でもやつとスイーツらしい物を作れるぜ！

ケーキなんて作った事ないけどスポンジケーキにクリーム載せてりやできるんじゃないの？

リ：『じゃあまずはスポンジケーキを作るよー♪』

おおーなんか頼もしいぞ！やっぱり女の子ならケーキくらい余裕で作れるのか！？

会場もリーナ料理長の実力に期待してる感じで盛り上がってるぜ！

スイーツファンタジーの二人は黙々と作業してる.....余裕こいてると痛い目見るぞ！？

こつみえてもリーナは出来る子なんだからな！

やる時はやるんだぜ！

リ：『勇くん、早くスポンジ持って来て！』

(……………)

……………え？

ここに来て『スポンジ持って来て』は無いだろ？

ああ！材料の事か！

じゃあ早速探して来るか……………

リ：『スポンジあったからやっぱいいよ！それより適当に果物とか持って来て！』

……………え？

流しにあった【スポンジ】を高らかに掲げて何言ってるんのあの人？

会場も一気にクールダウンしてるよ？

黙々と作業してスイーツファンタジーの二人の動きが綺麗に止まったよ？

『あなた達、やる気ありました？』

スイーツファンタジーの一人が何か恐ろしい物でも見るような目で訪ねてきた。

リ：『あるに決まってるでしょ！舐めんじゃ無いわよ！』

うーん、そのやる気が全て空回りしてるんだけどなあ……………

このままスポンジ焦がして負けました。みたいな結末じゃ俺は一生笑いだ！

それだけは避けねば！

「どけっ スポンジ女！あとは俺が作る！」

リ：『ええー！早くも料理長交代！？ケーキは私の得意分野なのに
いー！』

「ケーキなんて作る時間はもうねえーんだよ！」

あーあ、こいつあ負けそうな雰囲気だぜ。

何たって相手はもう仕上げに取り掛かってるし……。

『勝者はスイーツファンタジーのお二人です！』

やっぱり結果は負けました♪

だって俺達が出したスイーツは《溶かしたチョコレートにクラッカ
ー》だもん♪

チョコレート溶けるの見てたらなんか虚しくなってきた鍋ひっくり
返しそうになったし♪

リーナはリーナで勝負を捨てて相手にケーキの作り方を教わりに行
ってたし……。

相手も相手だったぜ。

なんせ敵であるリーナに律儀にケーキのレシピを教える始末！

その光景に感動したのか拍手を飛ばす観客………！

リ：『いやあ、今回の大会で得た物は大きかったね♪』

「うーん、ケーキのレシピとかなら家にあるんだけど……。」

リ：『ちげえーよ！レシピより大きな物を手に入れたじゃん！』

「え？無駄な時間とか無駄な体力とか？」

リ：『違います！友情だよ、ゆ・う・じ・よ・う♪』

ああ、そっちか……。

俺はあの二人と直接絡んでないから友情の『ゆ』の字も芽生えなかったけど……。

でもリーナがケーキを作れるようになったのは確かに大きな収穫だったかもしれない！

ところで……

「負けた俺達は何をすればいいの？」

リ：『うーん普通は黙って帰宅なんだけどそれじゃつまらないですよ？』

「まあ、確かにな……」

リ：『じゃあさ行きたいところあるから一緒に行こうよ』

行きたい所ってどこだ？

まあちよつと興味もあるし聞くだけ聞いてみるか……。

「場所によつては即却下だけど……。どこに行きたいの？」

リ：『シルフさんのところ』

シルフさんってのはあれだ。

確か風の宮殿の守護神だ……。そういえば守護神の中でまだシルフさんにだけ面識ないなあ。

ちよつと会つてみたい……。すんげー会つてみたい！

「ちよつと興味あるから行くか」

リ：『おおー！今日の勇くんはノリいいじゃん』そうと決まれば早速行くぜ！』

（１０分後）

俺はリーナが呼んだ素敵列車ことM r・トレインに乗車する。

ト：『今日はどこまで行くんだい？』

リ：『風の宮殿です』

ト：『了解……』

M r・トレインが汽笛を鳴らすと俺達を乗せた素敵列車は静かに発車した。

第42話：平成を喰らう魔神

豪華絢爛素敵列車に揺られる事1時間弱……………。

周りの景色なんてぶっ飛ばしてるMr・トレインは一体どれくらいの速度で走っているのだろうか？

もしかしたら音速の壁とか余裕で出来てるんじゃないか！？

リ：『早く着かないかなあゝ』ワクワクするなあゝ』

リーナが何にワクワクしてるのかは知らないけど俺だってすんげーワクワクしてる！

何たって守護神に会えるんだからなあゝ』

俺の中ではリヴァさんみたいに大人しい感じで凜とした人だといいなあゝみたいな感じ。

どっかの侍気取りの守護神みたいな人だったら即帰宅だぜ！

リ：『しかしトレインさんは乗り心地抜群だよね！これで私専属のオーケストラ隊なんていたら最高なんだけだなあゝ』

「流石にオーケストラ隊は無理だろ！頑張ってリコーダー独奏くらいがお前にはお似合いだ』」

リ：『じゃあ勇くんがリコーダー吹いてえー』

「俺のリコーダーを聞きたいとは……………命知らずな奴だぜ……………。フツ』」

リ：『え？あんな縦笛も吹けないの！？小学3年生かよ！あはははは』

「じゃあお前は吹けるのかあ！？ええ！！？」

リ：『私？たしなむ程度には吹けるような吹けないような……………』

ずいぶんあやふやな返事だなあ……………。

リ：『あーでもシルフさんフルートすんごく上手なんだよねえ。清楚で可憐な乙女にはシルフさんの奏でる旋律が一番似合うんだよね』

清楚で可憐な乙女ってのが誰なのか皆目見当もつかなかったけどシルフさんがフルートを吹けるという情報が入手できた♪

「フルート吹けるなんてなんかカッコイイな！俺も聞いてみたいぜ！」

リ：『でもシルフさんってめちゃくちゃ無口で人見知り激しいから初対面の勇くんに心を開いてくれるかどうか……………。』

人見知りが激しくて守護神は成立するのか？

ト：『そろそろ神殿に着くから降車準備をしろ……………』

Mr・トレインのアナウンスに従い俺達は下車の準備をする……………。

リ：『あれが風の神殿だよ』

……す、すげえ！

何が凄いかって！？

そりゃ神殿が宙に浮いてるところだろ！

神殿の下は底が見えないくらい深い谷だ！

落ちたら一発でこの世とおさらばできるだろうな！

リ：『早く行くよ？ボサツとしないで！』

「行くって言われてもどうやって行くんだ？道が無いんですけど……」

リ：『それなら心配いらないよ！ほら、道ならあるじゃんか！』

言われて見てみると谷と神殿の間に幅2メートルほどの道らしき物がある。

「えつと、これ渡るの？」

リ：『うん、空気のできた橋だけど強度は抜群だから大丈夫だよ？』

空気の橋……か。

確かに守護神が作ったんだから強度に問題は無いだろうけど……。
やっぱり怖いよ！

「もし、もしも落ちたらどうなるの？」

リ：『うゝん、強いて言うならバーンでボーンの後にグチャみたい
な感じ』

うつわぁー、マジ怖いんだけど……

別に高所恐怖症とかじゃないけど普通に怖い！

リ：『勇くんまさかビビってる？』

「うん、まあね……」

リ：『大丈夫！全力で走り抜けばあつと言つまに向こうに着くから
』

全力で走り抜く？
無理じゃない？

「ここは安全第一で歩伏前進がいいと思うんだけど……」

リ：『うるさい！グチグチ言つなあ！』

ガシッ！

ちよつ、えつ？

なんで手え握るの？

リ：『あーははははは！』

「うわあああああ！」

や、やばい……俺、死ぬかも……。

リ：『うんうん、なかなかスリルがあって楽しかったね♪』

「スリル有りすぎでおかしくなりそうだったぜ…」

命懸けの短距離走を走り抜いた先に俺達を待っていたのは風の宮殿入口前……。リーナの話では風の宮殿は夢をつむぐ妖精族の女王ティターニアから譲り受けた霊木で作られたらしく全ての魔を退けるほどの神聖な氣で満ちているらしい。

リ：『シルフさんいーまーすーかー！』

リーナが叫ぶと巨大な扉がギギギと音を立てて開いた！
神殿の中から木のいい香りが漂ってくる。
なんか凄く癒される感じた。

その神殿の奥には玉座がありその上に鎮座する一人の青年がいる……。

あれがシルフさんなのだろう。

キリリと整った顔立ちはとても美しく鮮やかな翠色の髪が肩まで伸びている。

一見すると西洋美人にしか見えないが立派な男性らしい。

リ：『シルフさんお久しぶりでーす♪遊びに来ちゃいました！』

シ：『やぁリーナ久しいね……………あつ、【平成を喰らう魔神】さん、はじめまして……………シルフです。』

(……………)

「えっと、シルフさんはじめまして。ところでシルフさん、【平成を喰らう魔神】って誰ですか!？」

シ：『稲葉くんの異名だってワイバーンが言ってたから……………呼んでみた……………。』

(……………)

ワイバーンさんは一体全体何を考えてるんだ？

リ：『バーンさんは人の異名を勝手に作って勝手に広めちゃうんだよ♪素敵な異名が貰えてよかったね【平成喰らい】さん♪』

【平成喰らいさん】……………か。

普通にダサイし俺のどこからそんな独裁者みたいな異名が浮かび上がるのやら。

シ：『ところで……………二人は何しに……………来た…の?』

リ：『インちゃん主催の大会で負けちゃってやる事無いから何となく来てみただけ♪』

シ：『暇潰し……………?』

リ：『うん♪』

シ：『じゃあ二人は今……………暇?』

リ：『思いつきり暇だよ、なんで？』

シ：『じゃあ、僕を稲葉さんの世界に……連れて行ってくれる？』

「えつと、シルフさん今なんて言いま……」

リ：『全力でOKだよ！ガイドは私に任せて！』

シ：『ありがとう……』

おーい、なに勝手に話進めてんですか？

リ：『じゃあMr・トレイン呼ぶから待ってて！』

シ：『いや……呼ばなくていいよ……。』

リ：『ええーMr・トレインは乗り心地最高だよ！？』

シ：『Mr・トレイン……過労死寸前……かも。』

や、優しい！

今まではまた家が半壊する可能性があるからシルフさんの訪問は丁重にお断りしようと思ったけど……その心配はなさそうだし

しかし……

「Mr・トレイン無しでどうやって俺の世界へ行くんですか！？」

リ：『勇くん、こう見えてもシルフさんは守護神だよ？』

シ：『こう見えてもは……余計。』

リ：『エヘヘ……じゃ、さっさと行こうよ！』

全くもって相変わらず強引な奴だ。

シ：『じゃあ力を解放するから……どいて……。』

力の解放って事はやっぱりシルフさんも変身できるのか？一体どんな姿に変身するんだろう。

……気になる。

シルフさんは力を解放し始めたらしく眼を閉じ精神を集中している……。

リ：『ちよつ、勇くん危ないって！』

シュパーン！

俺は一瞬の出来事に何が起こったのかわからなかった。
見渡すと周りの木々が綺麗に切り倒されている。

リ：『ふう、防御陣の展開があと少し遅れてたら勇くんばらばらになってたよ？』

「ああ、サンキュー。」

シ：『解放……完了。』

俺は砂塵の中から現れたシルフさんを見た。

そこに居たのは白銀の不死鳥……。

不死鳥なんて見た事あるはずもないけどとても神々しい出で立ちだ

……

リ：『シルフさんは変身すると剣翼鳥になるんだよ♪』

シ：『翼…剣で出来てるから……変身直後に斬撃発生……。』

(……………)

二人共……言うの遅くないか？

リーナが助けてくれなかったらマジで死んでたぜ。

シ：『二人共……背中に乗って。大丈夫、背中は剣じゃ……。ないから。』

俺達はシルフさんに促されるまま乗車(?)

リ：『やっぱりシルフさんの背中はふわふわで気持ちいいよぉ。』

確かにふわふわだぜシルフさんの背中は！

ずっとしがみついていたくなるような抱擁感が最高！

シ：『じゃあ……出発……。』

シ：『こ、これが緑茶………渋味……満点!』

シルフさんは我が家でリーナが煎れた緑茶に感動している。

俺はシルフさんの移動方法に度肝を抜かれたけど！

リ：『シルフさん、さっきの移動術教えてー！』

シ：『時空を切り裂くだけ……だから簡単だよ。』

そう、俺達はシルフさんの飛行スピードで時空を切り裂いてきたのだ！

一見Mr・トレインと酷似しているが全く違うらしい。

Mr・トレインが魔法で時空を歪ませるのに対してシルフさんは純粹な飛行スピードで時空を歪ませるらしい。

純粹なスピード＝魔法を使わないって事だ。

そんな神技をリーナは必死で教わろうとしている。シルフさんはそんなリーナには眼もくれず俺が夕食に作っ味噌汁と睨み合っている……。

シ：『ガイドさん……これは？』

リ：『それはお味噌汁って言うんだよ』簡単に説明すると……味噌の汁だよ』

うん、全く説明になってない』

シ：『味噌の汁……納得だ！』

ええー！？

それで納得しちゃったのシルフさん！？

リ：『よしっ！明日はシルフさんのためにショッピングに行こう！シルフも興味あるでしょ！？』

おいつテメー何勝手に予定作成してんだ！？

明日は学校だろーが！

シ：『でも稲葉くん……………学校ある……………。』

リ：『どーせ真剣に勉強しないんだから学校なんて行っても無駄だ
って勇くんが言ってたし大丈夫だよ♪』

(……………)

シ：『流石は【平成を喰らう魔神】……………』

……………おいっ！

第43話：ナース&クランケ

うーん、シヨッピングつと言われても結局どこに行けばいいんだ？
シルフさんが何に興味があるのかもわかんねーしなあ…………。

シ：『パリとか…………いいね。』

リーナと一緒に海外旅行のパンフレットを見ていたシルフさんがぶつ飛んだ発言をする…………。

「シルフさん、流石にパリは無理です！」

シ：『力の解放で…………。』

リ：『シルフさん、力の解放したら死人がたくさん出るから止めた方がいいですよ』

ナイスだリーナ！

シルフさんはちよつと考えて『あ……………！』と言っていた。
まさか気付いてなかったとは…………。

ピンポーン…………。

シ：『敵襲？ならば…………！』

誰か来たらしい。

リーナが一生懸命インターホンの説明をしている間に俺はモニターで誰が来たのか確認。

(……………)

モニターを確認するとそこにはフランとレオンがいた。
なんか嫌な予感がするからここはスルーだ。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン……………

……………うぜえ。

このままだと騒音問題に成り兼ねないので俺はドアを開ける。

フ：『やっぱりいましたか。ふふふ……………。』

—————

—————

—————

流石にフラン達もシルフさんの訪問には驚いたらしく

レ：『人見知りのシルフさんがこんなとこ来たらやばいよー』

フ：『シルフさんが仕事サボるなんて信じられませんわ！』

などと言いたい事を好き勝手に言っている。

シ：『たまには休養とか……………いるよ。』

リ：『そうそう、守護神にだって有給休暇は必要なんだからね！』

シ：『うんうん、流石はリーナ……………わかってるね。』

今思ったんだけどこの二人妙に気が合うなあ。

なんか以外の組み合わせだぜ！

リ：『んでシルフさんどこ行きたい？私は遊園地とかがオススメだよ』
シルフさんを利用して自分の行きたい所に行く気満々だなこいつ…………。

フ：『そういえば最近新しい遊園地ができたって雑誌に書いてましたよ？』

レ：『マジ！？そりゃ行くしかないでしょ！』

おいおい、俺の意見も聞かずに勝手に話進めんな！

「入場料はどうするの？俺は全員分は払わねえからな！」

『……………』×4

ちつ、なんで俺がこんな殺気に満ちた眼差しを向けられなきゃならないんだ？
「わかったよ！払えばいい」

んだろ！？払いますよ！だからさっさと準備しろ！」

『イエーイ！！』×4

『お客様5名様ですね。19800円になります。』

俺は遊園地の一日フリーパスを5枚購入してみんなに手渡す。

シ：『これが夢の世界への……………入場券

！』

がらチケットを見入っている。

シルフさんは眼を輝かしな

リ：『まずはジェットコースター行こうよ！風になるうぜ！』

シ：『お化け屋敷……興味有り！』

フ：『観覧車で100周しましょ♪』

レ：『僕は何でもいいよ！』

パンフレットを見ながら各々が行きたい場所を主張する。まあフラ
ンの要望は受け入れられないけどね！

今日はシルフさんメインだからここはお化け屋敷でいいだろう。

「じゃあお化け屋敷に行くか！」

リ：『お化け屋敷とかいーやーだー！こーわーいー！』

「駄目だ！決定権は入場券を買った俺にある！」

なかなか雰囲気出てるぜこのお化け屋敷！

廃病院風の建物の前の看板には【ドラキュラの館】とか書いてある
けど気にしない！

俺達は二班に分かれて入る事にした。
最初に入るのは

俺、リーナ、シルフさんの三人。

「じゃあ行くかぁー！」

リ：『いーやーだー！誰か助けてー！』

シ：『いざ……夢の世界へ………』

俺とシルフさんはリーナを引っ張りドラキュラの館へ入る………。

館の中はやはり病院っぽい作りで細い通路の先に受け付けがある。
ぼんやりとした赤い光で照らされた受け付けは見る者に静かな恐怖
感を抱かせる………。

リ：『ぜってーなんか居るよあそこ………』

俺達は慎重に歩きながら受け付けへ到着。

そこには散らばった資料などにべっとりと血糊がついていて

リ：『ひゃっ！』

と小さな悲鳴をあげる。

シルフさんも一瞬のけ反ったが血だらけのホワイトボードに何かが
貼ってあるのに気付いたらしい。

それはこの館の見取り図だった。

お化け屋敷に見取り図なんて要らないような気がするけど………。

シ：『道が別れてる………らしい。』

なるほど、途中で分岐があるらしい。

でもその分岐の先がどんな感じなのかはわからないから余計に不気味だ………。

リ：『は、早く行こうよ………。』

リーナは完全にびびっている。

俺達がある程度進むとそこは診療所みたいな場所だ。
パサッ

リ：『えっ？何………これ？』

リーナの頭には血染めのナースキャップが落ちてきたらしい。

カタッ

『……………』×3

今………後ろから物音が………。

俺達は恐る恐る後ろを見る。

そこには………

『私の帽子……………返して……………。』

胸にメスが刺さった血まみれナースが立っている。

『うわあああー！』×3

俺達は一斉に走り出す！

しかし血まみれナースは俺達を凄いスピードで追い掛けて来る！

走って着いた先は病室！

とにかくここも全力で走り抜ける。

ドサッ

突然俺の前を全力疾走していたリーナがこけた。

リ：『いやああああ！』

何事かと思つてリーナの足元を見るとそこには血まみれの患者がリーナの足をがちり掴んでいる。

パタッ

突然リーナが倒れた！

どうやらあまりの恐怖に失神したらしい。

「シルフさん、リーナが……………」

シルフさんも見事に失神してやがる。

俺は血まみれナースと血まみれクランケに挟まれた……………。

リ：『本当に死ぬかと思つた……………。』

シ：『あれが……お化けか……。』

結局あの後俺達は血まみれナースと血まみれクランケに館の外まで運び出された。

出口で血まみれ二人が猛烈に謝って来たところを見ると失神者を見るのは初めてだったのだろう。

謝られる俺は相当恥ずかしかったけど……。

フ：『しかし二人揃って失神とは……情けないですわねえ。』

レ：『僕達だったスキップで平然とクリアーできるよ』

後半組の二人はそう言いながら意気揚々とドラキュラの館に入って行った。

(30分後)

二人は血まみれ二人に連れられて出て来た。

だが気絶しているのはレオンだけでフランは何やら残念そうな表情。

二人に何があったのかを聞いたところ、レオンが血まみれナースを見て気絶したらしい。

フランは気絶したレオンを引きずりながら全力疾走して病室へ入ったらしい。

病室にはもちろん血まみれクランケがいるから足を掴まれる。

だがフランは血まみれクランケの潜むベットの下にレオンを押し込め、無き者にしようとしたらしい。

その異常事態に気付いた血まみれ二人は本業を忘れ人命救助をしたらしい。

リ：『惜しかったねえフラン』

フ：『でしょう？もう少し気取られないようにしてれば……』

うーんこの二人は最高にやばい奴らだな。

レオンに同情しちまうぜ。

レ：『………はっ！ここは？僕は生きて
るのか！？』

リ&フ：『残念ながら………ね。』

レオンの顔が真っ青になる。

シ：『レオン……起きたからジェットコースター……
…行こう。』

リ：『イエーイ！ジェットコースター行く行くう』

フ：『私も行きますう』

レ：『僕は止めとくよ！』

リ&フ：『はあ！？』

レオンがジェットコースターに乗る事を拒むと悪魔二人があからさまに殺気を含んだ眼でレオンを睨む。

レ：『僕も乗るぜ！』

リ&フ：『よろしい』

どうやらレオ

ンは二人の視線に耐え切れず折れたらしい……。
かわいそ過ぎだ。

シ：『じゃあ早く行こう……。』

リ：『おおー！』

早速走り出したリーナとシルフさんを俺達3人は追い掛ける。

レ：『ジェットコースター……。生きて降りられるかなあ……。』

(……………)

大丈夫だレオン、骨は拾ってやるから……………。

第43話：ナース&クランケ（後書き）

次回へ続きます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8190b/>

窓の向こうから.....

2010年10月11日02時10分発行